

神戸の交通

明治四十年 郵便貯金預入新規人員	三〇、二〇九人
明治四十年 郵便貯金拂戻度數及金額	九七、六〇五度
明治四十年 郵便振替貯金預入度數及金額	一、〇七七、八三六圓
明治四十年 郵便振替貯金拂戻度數及金額	一五、一八九度
明治四十年 電報發信數	二七三、六三二圓
明治四十年 電報着信數	二、〇六八度
明治四十年 電報發信數	和文八〇九、〇一九
明治四十年 電報着信數	和文八〇九、〇一九
明治四十年 電報發信數	和文六九〇、九三五
明治四十年 電報着信數	歐文一二七、九三九
明治四十年 電報發信數	歐文九九、六二五
明治四十年 電報着信數	互長二四里七町四二間
明治四十年 電報發信數	延長六四七里二二町四間
明治四十年 電報着信數	互長九町四一間
明治四十年 電報發信數	延長四里一九町五二間
明治四十年 電報着信數	心線延長四〇六里一四町四間
明治四十年 電報發信數	互長二四町二三間
明治四十年 電報着信數	延長三三里一八町二三間
明治四十年 電報發信數	心線延長一三二七里二〇町二八間
明治四十年 電報着信數	一、九五八人
明治四十年 電報發信數	自動電話 九
明治四十年 電報着信數	九、九八七、八四〇
明治四十年 電報發信數	一二、六八五

神戸の教育、宗教

一、初等教育

明治五年學制が布かれ、義務教育の制度が實行せられる様になつたから、明治五年から六年にかけて、今の市の区域内に一時二十四の小學校の設置を見るに至つた。併し明治十四五年の頃迄は、學校の數こそ多けれ、其設備、教育方法等は、誠に不完全で、多くは天井の低い假教場に兒童を充満させ、障子、衝立等の類で、教室や級を分け、採光、通氣等重要な學校衛生の諸點などには更に注意する所なく、教授の内容も舊來の寺小屋を去る事餘り遠からぬ狀況であつた。夫だから、小學開設後も尙暫くは、所謂手習師匠と稱する私學も澤山あつて、商家の子弟等で好んで之に通學し、依然名頭、商賈往來

神戸の教育宗教

等を學ぶものも少くなかつた。明治十五年に及んで、漸く教育振興の氣運に向ひ、改正の教育令により大に小學校の廢合新設等があつて、當時の神戸市街地に於ける、小學校は神戸、相生(後の湊川)、兵庫の三本校と其十二分校となり三つの本校は皆この年に新築の工を起して翌十六年に竣成した。又十五年に於て、後年市に編入せられた地區には、雲中、湊山、長田、眞陽、駒ヶ林の五本校と、其四分校とがあつた。而して神戸市内の之等の學校は、皆本校には上等科(四年)も置き、分校は下等科(四年)のみを置くの制であつた。翌十六年小學校規則の改正に従つて多少分校の異動があり、分校は初等科(三年)のみを置き本校には初等(三年)、中等(三年)、高等(二年)の三科を置く事となつたが、本校の數名稱等は前年と異なつた事はなかつた。次で明治十九年小學校令の改正があつて從來の初等中等高等科を改めて、尋常(四年)、高等(四年)の二科と、尙簡易科(三年)を置き、高等科は一郡區に限るに一校を以てした。夫で翌二十年以後は改正令に従つて大に小學校の組織、名稱、數、等が變つて來て、當時の神戸市中には神戸、湊川、兵庫の三尋常小學校(舊神戸、相生、兵庫の三本校

の後身)と、七個の簡易小學校の外新たに當時の阪本村(今の楠町)に唯一の高等小學校が起つた。翌々明治二十二年には市制が實施せられて葺合部が市に加はり、雲中尋常小學校が市内に入つた。次で二十三年に至り小學校令が又改正せられて、簡易科を廢し一郡市内に數個の高等小學校を設立し得る事となつたから、廿四年以後は市内には雲中、神戸、湊川、兵庫、の四尋常高等小學校と宇治野尋常小學校とがある事となり、この外神戸、湊川、兵庫三本校に屬する八つの分教場を置く事となつた。越へて二十九年に至り、湊部及び林田部が市に編入せられたので、更に湊山、西野、眞陽の三尋常小學校が市内に入つて、通計四つの尋常高等小學校と、四つの尋常小學校が市内にある事となつた。かくて小學校の設備内容も漸次に進歩はして來たが、まだ三十年以前は學齡兒童百人中就學者は五十人を超す事は殆んどなかつた。三十年には湊山、眞陽尋常二校は共に尋常高等小學校となり、三十三年以後は逐年小學校は増置せられ、就學の割合も漸次に進み、明治四十二年五月末に於ては次の如き小學教育の實況となつた。

神 戸 大 観

神戸の教育宗教

市立小學校數(最近) 三一校 内尋常高等小學校 八校 尋常小學校 二三校
 學 級 數 六五七學級 内尋常科 六〇二學級 男 三一六・五學級 女 二八五・五學級
 就學兒童數 三五、〇〇四人 内尋常科 三三、三三二人 男 一七、二八六人 女 一五、〇四六人
 高等科 二、六七二人 男 一、〇六八人 女 一、六〇四人
 小學校教員數 六四三人 内本科正教員 四五七人 専科正教員 七六人
 准教員 三五人 代用教員 七五人
 學齡兒童總數 五〇、六四五人 内男 二六、二四三人 女 二四、四〇二人
 人口百につき學齡兒童の比例 一三・四三人
 學齡就學兒童數 四八、六八八人 内男 二五、六五〇人 女 二三、〇三八人
 學齡兒童百人中就學歩合 男女通計 九四・九三人 男 九五・四三人 女 九四・三六人
 小學校費(四十二年度) 三〇二、四九五圓

次に現在の市立小學校名、所在地、創立年月等を示さう。

小 學 校 名	所 在 地	創 立 年 月
雲中尋常高等小學校	雲内橋通五丁目	明治六年四月

神 戸 大 観

神戸の教育宗教

小野柄尋常小學校	小野柄通二丁目	明治三十四年四月
生田川尋常小學校	御幸通一丁目	明治三十三年九月
脇濱尋常小學校	脇ノ濱町三丁目	明治三十九年九月
若菜尋常小學校	若菜通	明治四十三年三月
神戸尋常高等小學校	北長狭通四丁目	明治十五年七月
中宮尋常高等小學校	中山手通六丁目	明治三十八年五月
長狭尋常小學校	北長狭通四丁目	明治三十八年四月
諏訪山尋常小學校	中山手通四丁目	明治三十三年四月
山手尋常小學校	中山手通四丁目	明治三十四年四月
北野尋常小學校	中山手通三丁目	明治四十一年七月
楠尋常高等小學校	楠町五丁目	明治三十四年七月
湊川尋常高等小學校	楠町五丁目	明治三十四年七月
桶尋常小學校	上橋通一丁目	明治六年九月
多聞尋常小學校	楠町五丁目	明治三十三年九月
東川崎尋常小學校	東川崎町三丁目	明治三十六年十月
荒田尋常小學校	荒田町四丁目	明治四十一年十二月
兵庫尋常高等小學校	永澤町四丁目	明治十二年十一月

入江尋常小學校	西出町	明治三十三年九月
大開第一尋常小學校	大開通四丁目	明治三十四年六月
大開第二尋常小學校	大開通四丁目	明治三十四年四月
明親尋常小學校	小河通四丁目	明治三十三年九月
道場尋常小學校	須佐ノ通一丁目	明治三十七年十月
和田尋常小學校	和田崎町	明治三十四年四月
永澤尋常小學校	永澤町四丁目	明治四十一年一月
中道尋常小學校	中道通五丁目	明治四十二年十二月
湊山尋常高等小學校	奥平野村	明治六年六月
眞陽尋常高等小學校	西尻池村	明治六年八月
御幸尋常小學校	上庄通一丁目	明治四十一年四月
西野尋常小學校	三番町三丁目	明治六年十一月
濱山尋常小學校	東尻池村字西濱山	明治四十二年七月

この外目今新築中の小學校が二つある。又もこの宇治野尋常小學校は明治三十九年以來私立立志學校として、依然小學教育を施して居る。又晝間小學校に通學する事の出来ない業務ある兒童少年に向つて、夜間小學程度の普通教育を授ける特殊夜學校、が多くは明治三十六年以後盛んに小學校に附設せられ、目今は生田川、小野柄、脇ノ濱、若菜、神戸、山手、楠、湊川、橋、東川崎、荒田、大開男子(大開第二小學校内)、大開女子(大開第一小學校内)、明親、道場、今和(御幸小學校内)、湊山、眞陽、西野、濱山、宇治野、(立志學校内)等の夜學校が、特に所在を示した外は同名の小學校内にある。

この外中山手通三丁目なる私立同文學校は、在留清國人兒童のため、初等の教育を施して居る。

尙序に市内の幼稚園を表示しよう。

園名	位 置	公 立 別	設 立 年
神 戸 幼 稚 園	北長狹通六丁目	市 立	有志の寄附により私立として明治廿一年に設立後、卅一年市立に變更上
兵 庫 幼 稚 園	永澤町三丁目	市 立	同
頌 榮 幼 稚 園	中山手通五丁目	私 立	明治二十二年
聖 家 族 幼 稚 園	下山手通七丁目	私 立	明治三十六年

神 戸 大 観

神戸の教育宗教

善 隣 幼 稚 園	磯 上 通 五 丁 目	私 立	明 治 三 十 一 年
信 成 幼 稚 園	西 出 町	私 立	明 治 四 十 年
同 文 學 校 附 屬 幼 稚 園	中 山 手 通 三 丁 目	私 立	明 治 四 十 一 年

二、各種中等教育 神戸に於ける各種中等教育は、開港以後割合に早くから發達した。即ち公立學校としては、明治十年一月師範傳習所を改めて神戸師範學校とし、永く下山手通五丁目なる今の縣立神戸高等女學校の地にあつたが、明治三十二年御影に移つて今の御影師範學校となつた。神戸中學校も明治十一年師範學校内に開置せられたが、十五年五月に至つて、全く廢止せられ、後二十九年四月今の縣立第一神戸中學校が開校せられた。又今の縣立商業學校の前身たる神戸商業講習所も已に明治十一年北長狹の地に開所せられ、後十九年六月縣立神戸商業學校と改稱したが、以後校地は度々變つて、今の校地校舎は明治三十四年に移つたのである。尙明治十二年八月には、神戸醫學校が東川崎町に創設せられたが、之は明治二十一年四月に廢された。併し續いてこの月更に縣立神戸獸醫學校を下山手通五丁目(今の縣立神戸高等女學校運動場)なる舊縣立

神 戸 大 観

神戸商業學校の校舎に開いたが、之も二十五年三月に至つて廢した。かくて後最近十年許の間に、神戸に於ける各種公立中等學校は盛んに開設せられ、縣立神戸高等女學校、縣立工業學校等の外、更に一個宛の中學と商業學校を増すに至り、私立各種中等學校と共に、大に市中等教育の機關は備はる様になつた。次に現在の各種中等公立學校を表示しよう。

公立中等學校名	位 置	學 科 (修業年限)	開 校 年
兵庫縣立第一神戸中學校	二宮町一丁目	本科(五年)補習科(一年)	明治二十九年
兵庫縣立第二神戸中學校	長 田 村	本 科 (五 年)	明治四十一年
兵庫縣立神戸高等女學校	下山手通五丁目	本科(五年)技藝科(三年)	明治三十四年
兵庫縣立神戸商業學校	楠 町 七 丁 目	甲種本科(四年)	明治十一年
兵庫縣立工業學校	大開通八丁目	建築科、機械科、電氣科 (各三年)	明治三十七年
神戸市立神港商業學校	元町通四丁目	甲種本科(三年)高等科 (二年)	明治四十年

尙此外晝間實業に従事するものゝ爲に、夜間實業補習教育を授くる三つの市立實業補習學校があつて、其名稱、位置、學科等は次表の通りである。

神戸の教育宗教

神戸の教育宗教

實業補習學校名	位	置	學 科(修業年限)	開 校 年
神戸商業補習學校	元町通四丁目		國、英、獨の三語、商科 簿記、珠算、數學(各六月)	明治三十一年
湊川實業補習學校	上橋通一丁目		國語、英語、商科、簿記 珠算、數學、工科(各六月)	明治二十九年
兵庫實業補習學校	永澤町四丁目		同 上	明治三十一年

この外生田川小學校内に葺合裁縫學校があつて、主として尋常小學校を終つた女子の爲に裁縫及び國語算術修身等を授けて居る。

次に神戸に於ける中等私學の状況を見るに、之も早くから發達したが、明治二十年前後の頃迄は多くは、漢學、外國語等を授ける類のものであつた。併し最近十年許の間に中等普通教育を授ける男女の中等學校や、又各種實用の教育を授ける中等學校は大に殖れて、公立學校の不足を補つて神戸市の教育に貢獻する所頗る大なるものあるに至つた。現在の私立學校中最も古くて然も完全に發達したのは、まづ指を神戸女學院に屈せねばならない。女學院の前身たる英和女學校は已に明治八年今の校地に、主として米國傳道會社の給費、米國宣教師の手によつて建設せられ、始めは英語、和漢學等を授けたが、漸次日本信者の

帽子 各種 雜貨 賣販

弊店去る明治二十九年開業以來大方各位様の多大なる御愛顧御引立に依り日増隆昌の域に相進み來り候段厚く御禮申上候就ては各位様の御愛顧に酬ひん爲め一層薄利と懇切を旨として營業可仕候間何卒不相變御引立御購求あらん事を偏に奉願候 店主敬白

神戸市三ノ宮町二丁目

高 長 商 店

三ノ宮陳列館内四十二號

高 長 出 張 店

神戸市北長狹通七丁目
宇治川上ル

森 齒 療 院

院主 森城太郎

●米國式義齒ノ製作

●金冠及無床義齒

●口腔全斑無痛治術

教授

實用ト懇篤ト
ヲ趣旨トシ 英國、漢、數、簿

ノ數科ヲ早朝ヨリ夜間隨時個人
又ハ組教授ノ需ニ應ズ各科共 簡易速

成科アリ設各學校入學豫備

各種受験準備及各種學生複習

等其他一定ノ修學時間ナキ男女有職務者又ハ
就職希望者等ノ就學ニ至便也

神戸市有馬道商業學校少下酒屋横西入

神港實用學院

神 戸 大 觀

賛助をも得、校舍教科を擴張し、二十七年以後今の名稱に改め、最近は外觀内容共に完備して、普通部は新たに高等女學校としての認定を、文部省から得た程である。この校は基督教主義を以て淑良なる女子を養成するを目的として起つたが、之に對して、佛教主義を標榜し、佛教信者の給費によつて、明治二十年、元町三丁目善昭寺内に親和女學校が起り、二十五年一旦廢したが、翌年更に今の校主友國晴子女史は、私塾として其後を襲ぎ、爾後漸次發達して四十一年完全なる高等女學校の組織となり、親和高等女學校と改稱して之亦文部省の認定を得た。この外關西學院は市の東郊西灘村にあるけれども、實は神戸市の子弟の爲めの中學校で、之も基督教事業の一として明治二十二年創立以後漸次完備して、普通部は四十二年徴兵令により認定せられ、普通の中學校となつた尙關西學院の女子部ともいふべき性質の松蔭女學校も、二十五年創立以後大に發達して、之亦現時は市内に於ける完備せる女學校となつた。又多少區費の補助を仰ぐ湊東女學校、兵庫女學校は殊に技藝の教授に於て大に優れて居つて有名である。次に現時に於ける重なる市内の私立各種中等學校の名稱、位置、學科等

神戸の教育宗教

神戸大観

神戸の教育宗教
を表示しよう。

私立中等各種學校名	位 置	學 科 (修業年限)	創 立 年
神戸女學院	山本通四丁目	普通科(五年)、高等科(四年) 英語専修科(二年)、音樂(五年)	明治八年
親和高等女學校	下山手通七丁目	本科(四年)、技藝科(三年)	明治二十六年
松蔭女學校	中山手通六丁目	本科(四年)、裁縫科(三年)、 補習科(一年)	明治二十五年
淡東女學校	楠町五丁目	預科(一年)、本科(三年)、補 習科(一年)、専修科(三年)	明治三十五年
兵庫女學校	東出町二丁目	本科(四年)、技藝科(四年)	明治三十四年
家政女學校	中山手通六丁目	預科(一年)、本科(二年)、補 習科(一年)、幼年科(四年)、 本科(三年)、 英佛語、圖畫、編物、外二科 (十年)	明治四十一年
錦紡兵庫女學校	東尻池村	聖書、幼稚園理論、實習(二年)	明治四十一年
聖瑪利亞女學校	裏 町	聖書、幼稚園理論、實習(二年)	明治四十一年
頌榮幼稚園保母傳習所	中山手通五丁目	聖書、幼稚園理論、實習(二年)	明治四十一年
神戸産婆學校	花 隈 町	産婆學、看護學(二年)	明治三十二年
ランパス紀念傳道學校	中山手通四丁目	聖書、教會史、國語、音樂、 神學外四科目(三年)、 本科(中學程度三年)、 預備科 (二年)、珠算科(六月)	明治二十四年
育英義塾	石 井 村	英語(四年)	明治三十五年
パルモニア英學院	北長狹通四丁目	英語(一年)	明治十九年
シヨーツバント英學校	中山手通二丁目	英語(一年)	明治三十二年

神戸大観

三、高等教育 市内に於ける純然たる高等教育機關は、唯官立神戸高等商業學校が筒井町にあるのみである。同校は明治三十六年の開校で教科は豫科(一年)本科(三年)に分けられて居る。豫科は中學校、甲種商業學校卒業者を入れて、本科の豫備たる教育を施し、本科は豫科修了生に、高等の商業教育を與

神戸の教育宗教

神戸英學校	花 隈 町	英語	明治四十二年
基督教青年會英語學校	中山手通六丁目	英語(三年)	明治四十年
神戸英清學校	中山手通三丁目	英語國語、漢文、數學(三年)	明治四十一年
高山英學會	楠町五丁目	英語(二年)	明治三十五年
精華學舍	下山手通六丁目	國漢英語、數學、理化學、簿 記、外四科目	明治三十九年
以文學校	永澤町二丁目	國英語、數學、簿記(五年)	明治三十二年
大阪簿記學校神戸分校	楠町二丁目	簿記(二年)	明治三十二年
神戸簿記學校	湊町一丁目	簿記	明治三十六年
神戸藥學學校	永澤町一丁目	獨逸語、製藥學、外十科(二年)	明治四十一年
神戸神學學校	生田町一丁目	神學(三年)	明治四十一年
神戸訓盲院	加納町二丁目	生理、解剖、按摩、鍼、外三 科(三年)	明治三十八年

へて居る。其學科目は豫科第一部（中學校卒業生）に倫理、作文及び書法、商業算術、簿記、商業通論、經濟通論、法學通論、英語、體操、を課し、豫科第二部（甲種商業學校卒業生）に倫理、作文及び書法、讀書、數學、物理、化學、博物、法學通論、英語、體操を課し、本科に、商業道德、商業文、商業算術、商業地理、商業史、商品學、經濟學、財政學、統計學、民法、商法、破産法、國際法、商業學、商業實踐、簿記、英語、清佛獨露西語の内一語、體操を課して居る。尙本校は東京高等商業學校と同一程度で、本科卒業生は東京高等商業學校専攻部に入り、必修科目として更に經濟學、民法、商法並比較商法、國際法、國法學、東洋經濟事情、英文、第二外國語、近時外交史及び刑法（領事科志願者の外は選擇科目）、を學習する外、専修科目として、貿易科、銀行科、取引所科、交通科、保險科、商事經理科、領事科の内一科を専攻する事が出来る。本校は北摩耶山を負ひ、南大阪灣に臨み、土地高燥寒暄好適の處で、敷地約一萬二千坪、校舍は輪奐たる洋館棟を竝べ、内容亦完備して居つて其商品標本陳列室は公衆のために開放せられて居るし、校外者にして圖書閱覽の便を得る事も出来る。

高等商業學校の外、其東隣の關西學院神學部、及び神戸女學院高等科も實は高等の教育を施して居る部類である。

四、圖書館及教育會 圖書館としては市内に唯一つ私立桃木書院圖書館が生田町二丁目にある許だ。之は明治三十五年から公開せられて居るが、主として國史研究の補助となるもので二萬冊餘の和漢書と、百冊餘の洋書と、圖畫殊に多くの古地圖類を藏して居る。

近頃市の教育社會其他有志の間には、頻りに大規模の圖書館設立の考案中であるから、數年の内には稍や完備せる圖書館を見る事が出来るであらう。

現今市内には都合十の私立教育會があつて、普通會、講習會、通俗講談會、雜誌發行等によつて、或は教育者、一般會員の交際修養の機關となり、或は一般市民、兒童の教化の機關となり、直接間接に市教育の補助を爲し、市教育の進歩を助けて居る事は少くない。之等の内私立兵庫縣教育會は明治二十二年の創立で最も古く、會員も全縣下に亘つて最も多く二千を上り、事業も雜誌發行の

神戸の教育宗教

外、各種講習會の開設、各種教育事業の調査報告、圖書發行等、多岐に涉つて盛んに行つて居る。之に次いで純然たる市の教育會として創立の古いのは、明治二十四年創立の神戸教育會、翌二十五年創立の兵庫教育協會等で、他は何れも三十年以後に出来たのである。併し何れも會員は、三百乃至八百を數へ、頗る盛況である。次に各教育會の名稱と事務所々在地とを示さう。

教育會名稱	事務所々在地	教育會名稱	事務所々在地
兵庫縣教育會	下山手通四丁目	兵庫教育協會	永澤町四丁目
神戸市教育會	同上	入江共育會	西出町
葦合教育會	熊内橋通五丁目	今和教育會	上庄通一丁目
神戸教育會	北長狹通四丁目	兵庫北部教育會	大開通四丁目
湊東區教育會	楠町五丁目	道場學校教育懇談會	須佐通一丁目

五、宗教

市民の大部は神道佛教を奉じ、少部分は基督教を信じて居る。まづ市内に於ける神社に就いて見るに、官幣社としては有名なる生田、湊川、長田

の三神社があり、縣社には七宮、和田の二神社がある。此外三十三の村社と三十の無格社があるから、市は通計六十八の神社を有して居るのである。然して明治四十一年初に於て神職總數は二十七人、氏子總戸數は八萬五千餘である。六十八社中生田神社の氏子は別けて多く約三萬五千戸もある之に次いで氏子の多いのは湊川神社で約一萬戸、次に七宮、和田二社で約各四千戸ある。次に四十一一年の始に於ける神道各派教會は、神理教一六、神道本局一二、御嶽教一〇、金光教一〇、實行教七、黒住教六、大社教四、扶桑教三、修成派三、大成教二、通計七三ある。

次に佛教は、淨土、眞、日蓮、時、臨濟、曹洞、黃蘗、眞言、天臺、の九宗が分布せられて居る、今各宗の明治四十一年始に於ける寺院數、教會數、檀家數及び最も有名なる寺院名等を表示しよう。

宗 派	寺院數	教會數	檀家數	有 名 なる 寺 院
淨 土 宗	三三	一	三三六八	南仲町 永福寺、島上町 來迎寺、楠町七丁目 安養寺、元町五丁目 極樂寺

神戸の教育宗教

神 戸 大 観

神戸の教育宗教

眞 宗	日 蓮 宗	時 宗	臨 濟 宗	曹 洞 宗	眞 言 宗	天 臺 宗	計
一四	一〇	五	二二	四	六	三	八六
一五	八	一	三	一	八	六	四三
二六八五	一九〇六	一五八八	三、一九	三九一	五〇	一九〇〇	七三四
元町三丁目善昭寺、中道通一丁目福泉寺、 群合中尾泉隆寺、三川口町久遠寺、 福原町本壽院、下山手七丁目本壽寺	須佐ノ通一丁目眞光寺、南逆瀬川町藥仙寺 門口町福殿寺、楠町七丁目廣殿(楠)寺、 奥平野祥福寺、西柳原町福海寺	羽坂通二丁目福昌寺、野田村満福寺	中山手通七丁目長樂寺	西仲町金光寺、再度山大龍寺	北逆瀬川町能福寺、生田町四丁目西雲寺		
一五、七四一							

次に基督教は、我邦の中では無論信者の多い方である。今左に現時に於ける教派、各派の教會(講義所)數及び有名なる教會堂、明治四十一年始に於ける各派の信者數等を表示しよう。

教 派	(講義所)數	有名なる教會堂		設立年月	信者數
		會 堂 名	所在地		
天主教	二	聖母七つの哀の教會	仲町	明治四年	七二七
		聖家族教會	下山手通七丁目	明治卅五年八月	

神 戸 大 観

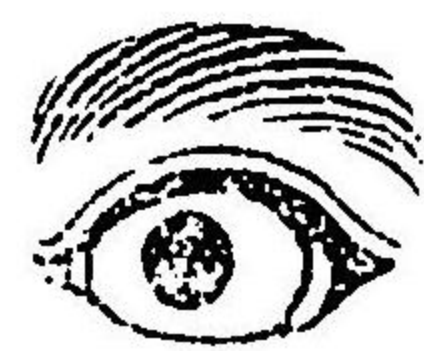
神戸の教育宗教

プロテスタント	日本組合	日本メソヂスト	浸禮(バプチスト)	日本聖公會	日本基督	新派福音派	セブンスデー、アドベンチスト	救世軍	計
二	四	二	二	二	三	三	二	一	一九(五)
ユニオン教會堂	多間基督教會	日本メソヂスト教會	神戶浸禮教會	聖米伽勒教會	神戶日本基督教會	福音教會神戶講義所	セブンスデー、アドベンチスト神戶教會	救世軍神戶小隊	
明石町	下山手通六丁目	下山手通五丁目	下山手通三丁目	中山手通六丁目	山本通五丁目	楠町四丁目	山本通一丁目	多間通四丁目	
明治五年八月	明治七年四月	明治十年十月	明治十九年九月	明治廿四年五月	明治廿七年四月	明治廿九年五月	明治卅一年八月	明治卅五年	
一六〇	一四一八	三二七	二三八	二八八	四九四	二七	五二	三三	三、七三三

六、救 濟 教育宗教に附帶して、市内に於ける各種救濟の現況を示すに足る表を次に示さう。

救濟所名	所在地	救濟の主旨	男	女	計	創立年月
財團法人 神戸孤兒院	中山手通七丁目 番外九四	無告の孤兒及之に等しき兒童の救濟	六一	七三	一三三	明治廿三年五月

眼病一般義眼
トラホーム治療法



●トラホーム治療は
本院の専攻とする
所なり

●ながらくなをらぬ
トラホーム眼病者
は本院に來らるべ
し

神戸市兵庫南仲一十番地

福山眼科醫院

派遣看護婦

普ク病院及ビ患
家ノ招聘ニ應ズ

神戸市北長狹通七丁目

兵庫縣私立看護婦會々長

宮崎辨藏

(電話八二二三)

免狀ヲ有スル者

數十名募集ス

神戸唯一の温泉場

●外科諸病に效顯著しき作州倉敷湯の郷鷺温泉

●内科諸病に效顯著しき紀州田邊 瀬戸鉛山温泉 濱の湯

の兩温泉の原湯を引寄せたる天然温泉場にして原料を潤澤に貯藏し温
泉の新鮮を保ち浴場の清潔を期す殊に大庭園を築造し鯉魚を放ち小禽
を養ひ勤めて浴客に快樂慰安を與ふべく種々の設備あり

温泉旅館

調理新鮮にして

低廉なり

舊湊川の古松を見渡し會下山公園を望み土地閑靜にして風塵起らず眺
望絶佳にして空氣新鮮なり 冬は暖く夏最も涼しく温泉療養所として
頗る適當なるのみならず又一日の清遊として大に趣味あり

舊湊川の上 皮池の西

長生温泉
たからや旅館

電話長乙

四三三番

辨慶印

ホワイトシャツ
カラ、カフス
製造發賣元

洋服附屬品各種販賣所ハ

神戸市兵庫永澤町四丁目

山淺商店

神戸の市政

一、自治政 明治初期の市政に就いては、沿革の條下に譲り、茲には神戸兵庫兩市街が行政上合同して一體となつた明治十二年以後の沿革を略叙して、更に現時の市政の一般を解説しよう。

明治十一年七月發布の郡區町村編制法により、翌十二年一月當時の神戸、兵庫兩市街及び阪本村を合せて神戸區とし、四月から區會を設け、全区から二十五人の議員を選出し、區の自治政に参せしめた。後二十年六月區會議員の數を二十人に更め、又従前の選舉區たる、神戸鐵道南部、同北部、兵庫湊川東部、兵庫岡組、兵庫北濱部、同南濱部の六部を更めて、神戸部、湊川東組、湊川西組の三區とした。明治二十二年四月市制が實施せられ、従前の神戸區に葺合及び荒田の二村を合併して神戸市と稱し、市會は議員三十六名を定員とし、之を第一(葺合)第二(神戸)第三(湊東)第四(湊西)、の四選舉區から選出する事となつた。此時又市制に基き、區會條例を制定し、市會議員の選舉區を各一區とし、

神戸の市政

神戸の市政

區會を設け區會議員の定数は神戸區會二十四人、湊東區會二十人、湊西區會二十人、葺合區會十人とした。後二十五年七月葺合區會議員は十八人の定員に増され、二十八年四月には、市會議員の總數も三十九名に増された。次で二十九年四月市の區域は擴大され、新たに、湊村、林田村、元須磨村の内池田村が市部に編入された結果、此年十一月湊區及び林田區の二區會を追加し此區會議員の定数は湊區會十二人、林田區會十八人とせられた。市會議員の選舉區は依然四區とし唯三十年三月湊區を第三選舉區に、林田區を第四選舉區に加へたのみで、議員總數も依然三十九人であつた。市會議員の數は其後三十八年更に四十二人に増されたが各區會議員の數は今も従前と變らないのである。かくて現時自治政機關としての市は、あらゆる市の自治政と、委任の國務に任じ、區は主として、教育事業區有財産管理等の事に任じて居る。即ち市公民より互選せる四十二人の議員より成れる市會は、神戸市を代表し、市に關する一切の件及び諸種の委任國務を議決し、市長一人、助役二人及び市公民より選出せる名譽職市參事會員六人計九人より成れる、市參事會は、市を統轄し、行政事務を擔任

し、市長は市政一切の事務を指揮監督して居る。其神戸市役所は廳舎新たに橋通二丁目に成り、輪奐の美、市内之に比するものは多くない程である。所内は處務の便宜上、内局、庶務課、勸業係、教育課、衛生課、給水課、土木課、戸籍課、兵事係、稅務課、會計課、調度係等に分れ、職員としては市長、助役、名譽職市參事會員の外、收入役、技師、囑託技師、書記、囑託書記、技手、囑託技手、助手、事務員、市巡視、徵集員、掃除監督、掃除巡視、市醫等があつて、各課係、職員が一切の事務を分掌して居る。

市役所の外、市の公所には、東川崎町一丁目に船舶給水所があつて、書記、事務員、船長、機關長等を置いて事務を分任し、上水検査所は東山病院内にあつて、囑託技手事に従ひ、避病院たる市立東山病院は、今や會下山東麓に宏壯なる建築略落成し、優に數百千の患者を收容し得らるべく、現に院長、醫員、藥局長、調劑手、書記、事務員、看護婦等の職員があつて傳染病患者の治療に遺憾ない施設となつて居る。尙衛生機關としては市内には近時總計二七六の衛生組合があつて、市民は皆何れかの組合に屬して衛生的自治を行つて居り、疾病

神戸の市政

神戸の市政

治療の機關としては、市内には、前記の市立東山病院及び楠町七丁目縣立神戸病院、福原町なる縣立福原病院の外、四十一年始に於て、二十四の私立病院、三〇〇人の普通醫師、二六人の齒科醫、五九人の藥劑師、二二五人の産婆、三二人の看護婦、一七人の獸醫がある。

序に市の衛生に最も重大の關係ある、市水道に就いて略説しよう。始め明治二十年六月神戸區會は水道敷設測量費を可決して、人口十三萬に對する設計を當時の神奈川縣雇工師故英人バーマー氏に託し、翌廿一年三月設計は出來上つたが、此工費四拾萬圓の負擔を以つて、困難として決行しなかつた。次で市制實施後明治二十四年に至り、市會の議漸く實行に決し、更に内務省雇工師バルトン氏に囑して設計せしめ、二十六年七月市會は終に水道敷設案を議決して、直ちに起業の事を其筋に稟請した。之によると、水源を布引、再度の兩溪流に採り、給水人口十五萬人、工費九拾七萬圓、内參拾萬圓の國庫補助を得ようとするのであつた。併し議會解散日清戰役等のため、甚だ遅れて、二十九年四月に至り漸く認可を受け、政府は二十九年度より向ふ五箇年間毎年六萬圓宛を補助

することとなり、三十年三月愈々工事に着手した。この後幾許もなくして、市は更に其發達に鑑みて、擴張の設計を爲し、三十二年三月改めて水源を布引、鳥原の兩溪流に採り、人口三十五萬を養ふ設備の認可を得た。而して其布設費總額 三二九萬圓で、國庫よりは六八萬圓の補助を受くる事となつた。かくて工事は二期に分け、第一期たる布引溪流に於ける工事は三十三年三月に成り、四月よりは始めて市内に給水を實施し、殘餘の第二期工事は三十八年五月竣工し、此時迄は、實際約三四一萬圓の敷設費を要した。現今市水道は、布引谷、鳥原谷に貯水池を、北野及び奥平野に淨水構場を有して居る。北野淨水構場は布引谷から源水を受け、海面上百尺以上なる市内高層區域に配水し、約十五萬人に給水し、奥平野淨水構場は鳥原谷貯水池と一部は布引谷より源水を受け、海面上百尺以下なる市内低層區域に配水し、約二十三萬人に供給して居る。而して、明治四十一年始に於て、水道鐵管の延長は四二里二四町一三間、鉛管の延長は一里二三町六間、給水栓の總計は一四、八四三、(内計量法によるもの二、九六四、放任専用九、九五七、放任共用私設一、六八八放任共用市設二三四)、

神戸の市政

消火栓の總數は一、三九三、(内市設一、一二四、私設二六九)であり、四十年中の淨水構場配水量は二九一、三三五、二五八立方呎である。

尙市は近時戸口増殖の趨勢に伴ひ、更に水道擴張案を立て、已に決定した。之によると設計の大様は、新たに武庫川上流有馬郡所屬字千刈溪流と洗谷溪流とに貯水池を設け、水流を之より約一二・一六五間の延長を有する鐵管によつて神戸春日野淨水構場に導かんとするので、總工費は約千萬圓の豫算である。

次に市の財政を略述せんに、明治四十年度に於ける普通市費は、歳入二、五一〇、四〇八圓、歳出二、一九〇、二〇五圓で、前年に比し俄かに歳出入共百萬圓餘を増したの、築港の爲國庫納附金が百萬圓あつたからである。又同年度に於ける水道費、導水事業費、船舶給水事業費の三者合計歳入五九六、九六六圓、歳出五一六、七六七圓、區費歳入六〇四、一五〇圓、歳出五二三、二五六圓で、以上四十年度に於ける市經濟總歳入は三、七一一、五二四圓、總歳出は三、二三〇、二二八圓である。又市民の諸税負擔の狀況を見るに、明治四十年度に於て、總市民の負擔した税額は、國稅一、九三五、九六九圓、市稅六九九、二二

四圓(縣費は市費から支出して居つて四十年度の負擔額二七七、九八九圓)、區費二六二、〇七一圓、合計二、八九七、二六四圓で、平均一戸の負擔額三一・七九八圓、平均一人の負擔額七・九六八圓である。尙明治四十二年十二月末に於て市公債總額は、五、九〇六、二〇〇圓(内水道公債二、六八四、四〇〇圓、築港公債三、五〇〇圓、市債券七二一、八〇〇圓)あつた。

更に序に市民の各種議員選舉有權者數を見るに、明治三十七年四月に於て縣下貴族院議員多額納税互選者十五人の中市に於ては中山手通五丁目小寺謙吉、北長狹通五丁目九鬼隆輝、湊町一丁目小會根喜一郎、湊町二丁目岸本豊太郎の四人を有して居り、明治四十一年五月に於て衆議院議員選舉有權者は五、一四五人(選出議員二人)、明治四十一年九月に於て縣會議員選舉有權者は、八、四九九人(選出議員二人)、明治四十年四月に於て市會議員選舉有權者は、八、六五〇人(内一級一八一人、二級八六七人、三級七、六〇二人)であつた。

尙序に明治四十一年始に於ける市内在籍陸海軍將校人員を見るに、陸軍一〇三人(内現役二〇人、豫備役四八人、後備役三五人)海軍一〇人(内現役七人、後備

神 戸 大 観

神戸の市政

役三人)、合計一一三人ある。又同時に於ける本籍別陸軍下士卒員数は下士四〇〇人(内現役三〇〇人、豫備役一四一人、後備役二三八人)、卒七、四五六人(内現役九四五人、豫備役九一〇人、後備役一、一二〇人、補充兵役四、四八一人)、計七、八五六人。同海軍下士卒兵員は、下士六一人(内現役一四人、豫備役二〇人、後備役二七人)、卒一七五人(内現役四六人、豫備五五人、後備七四人)計二三六人である。

二、一般官衙公署 市内に於ける重なる一般官衙公署は次の通りである。

官 署 名	所 在 地	官 署 名	所 在 地
兵 庫 縣 廳	下山手通四丁目	神 戸 稅 務 署	下山手通六丁目
兵 庫 縣 港 務 部	花 隈 町	神 戸 專 賣 支 局	元居留地海岸通
神 戸 警 察 署	三宮町一丁目	東 尻 池 村	
相 生 橋 警 察 署	相生町一丁目	雲 井 通 四 丁 目	
兵 庫 警 察 署	濱崎通一丁目	濱 崎 町 四 丁 目	
神 戸 水 上 警 察 署	海岸通四丁目	榮 町 通 六 丁 目	
		神 戸 遞 信 管 理 局	
		神 戸 專 賣 支 局	
		專賣局神戸製造所附專賣局大阪收納所神戸出張所	
		西 部 鐵 道 管 理 局	
		神 戸 專 賣 支 局	

神 戸 大 観

神 戸 地 方 裁 判 所	橋 通 二 丁 目	神 戸 聯 隊 區 司 令 部	中山手通七丁目
同 檢 事 局	同 上	神 戸 憲 兵 分 隊	荒田町一丁目
神 戸 區 裁 判 所	同 上	神 戸 小 林 區 署	荒田町三丁目
同 檢 事 局	同 上	花 薙 檢 査 所	磯上通二丁目
神 戸 監 獄	石 井 村	警 務 總 督 府 專 賣 局 神 戸 支 局	雲 井 通 四 丁 目
神 戸 監 獄 兵 庫 出 張 所	松 原 通 五 丁 目		

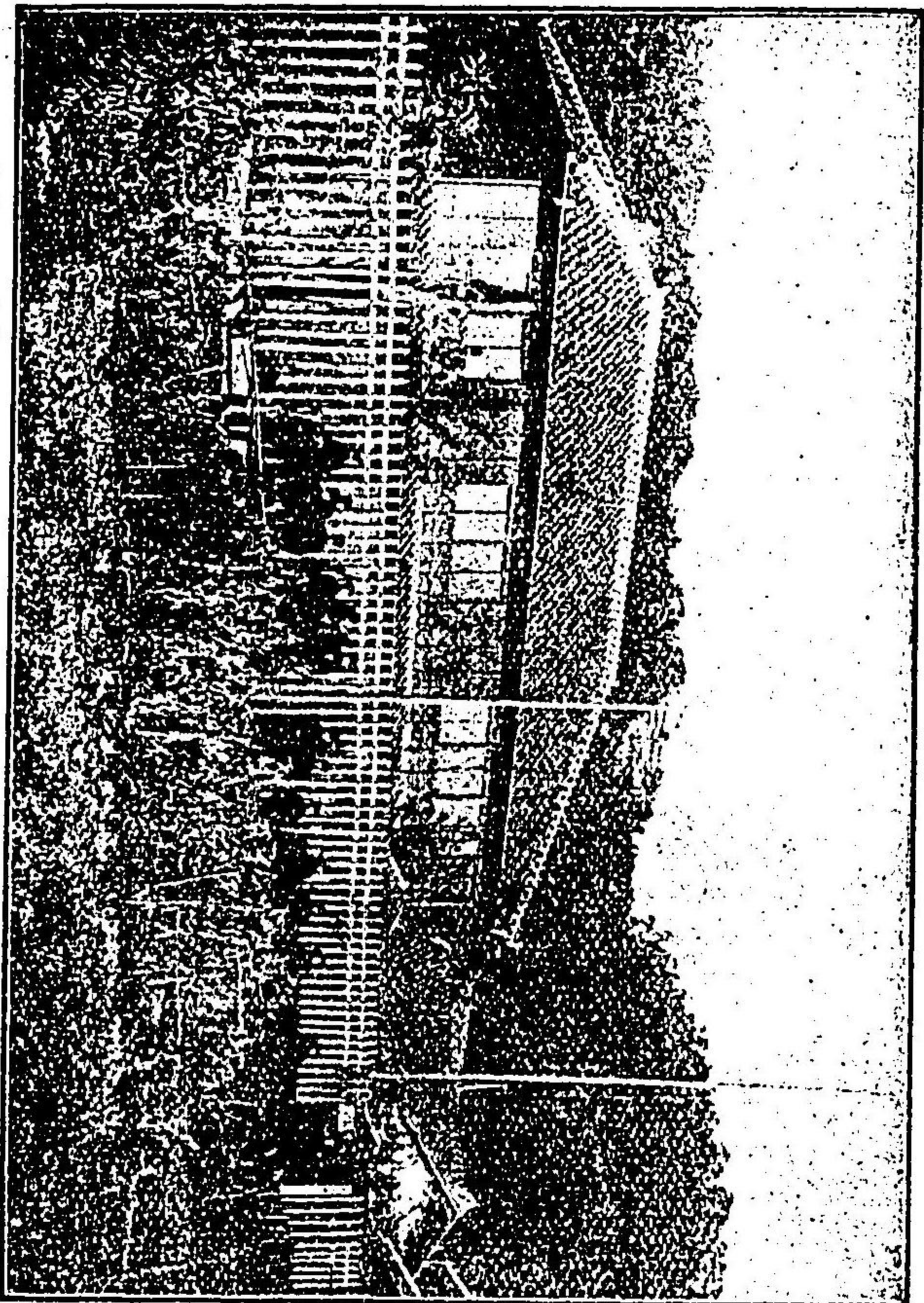
右表の中縣の一般行政機關たる兵庫縣廳は明治元年五月の創設で現時の縣管轄區域は明治九年八月改定の儘である。現今縣廳内は、知事官房、内務部、警察部の三大部に分れ、知事官房には、更に秘書係、文書係、外務係の三係があり内務部には、庶務課、會計課、農務課、商工課、學務課、社寺兵事課、土木課の七課があり、警察部には、高等課、警務課、保安課、衛生課の四課がある。而して知事は一般の縣行政を統べ、知事官房に主事、各部に部長、各課に課長を置き、各部課の事務を統一せしめ、事務官、事務官補、警視、技師、屬、視學、警部、技手、通譯、縣書記、巡查等の職員があつて事務を分掌して居る。

神戸の市政

神戸の市政

神戸税関は開港當時明治元年二月神戸運上所といふ名の下に起り、後明治五年十一月現名に改めて今日に及んだ。税関は關稅、噸稅に關する事務を掌り、併せて輸入品に對する内地消費稅の賦課、輸出品に對する内地稅下戻及び輸出交付金に關する事を掌理して居る。關内は税關長官房、庶務課、貨物課、鑑定課監査課等に分れ、別に税關監視部があつて、海務係、陸務係等之に屬し、税關長は關務を總理し、下に事務官、監視官、鑑定官、事務官補、監視、鑑定官補監吏、技手等の職員があつて、事務を分掌して居る。尙神戸税關の管轄區域は攝津(川邊郡以西)播磨、備前、備中、備後、安藝、石見、出雲、伯耆、因幡、但馬、丹後、隱岐、伊豫、土佐、阿波、讃岐、淡路の十八箇國で、管内四開港場に、税關支署を置いて税關事務を分掌せしめ、主要なる十普通商港には、税關監視署を置いて密輸出入を監視せしめて居る。尙序に現時市内にある外國公館を表示しよう。

外國公館名	所在地	外國公館名	所在地
北米合衆國領事館	明石町五丁目	アムステルダム領事館	北町一〇四



私立神戸育英義塾

教位創

立置科

- 實用科 漢文、習字作文、簡易英語、英譯、英會話、數學、珠算、簿記ノ數科トシ希望ノ二科若クハ數科ヲ熟達セシメ卒業後ハ實業界ニ雄飛スルコトヲ得セシム
- 普通科(中學程度) 修身、國語、習字、作文、漢文、英語、數學、體操以上全部修業セシム
- 豫備科 商業、工業及ビ中學校へ入ラントスル者ニ必須ナル諸學科ヲ教授ス

明治三十二年ニシテ同三十五年認可ヲ受ク
神戸市石井村(湊山ノ西南麓)

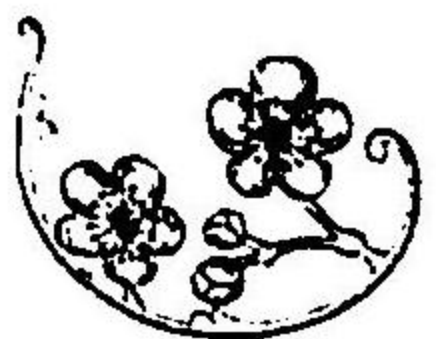
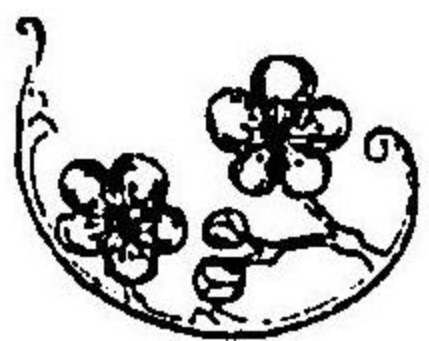
内外國切手繪端書及 アルバム類販賣所

繪葉書製造 寫眞撮影

神戸市元町通三丁目一四〇ノ一

合資
社 榮屋商店

電話二一五四五番
振替大阪七七四九番



神戸大観

ベルギー領事館	江戶町一〇四	ノルウェー領事館	明石町三一ノA
アラビヤ領事館	京町一〇	ロシア領事館	中山手通一丁目九
アルゼンチン領事館	三宮町一丁目三〇八	オーストリア、ハンガリー領事館	浪花町九
チリ領事館	下山手通三丁目三三	イタリア領事館	山本通三丁目一八
イギリス領事館	浪花町九	イスパニア領事館	下山手通三丁目三三
フランス領事館	山本通二丁目一三	ポルトガル領事館	山本通三丁目一八
ドイツ領事館	東町一一五	清國領事館	下山手通二丁目四五
ベルギー領事館	中山手通四丁目	濠洲貿易事務館	元居留地七
オランダ領事館	北野町一丁目		

この外スイス國は、領事の事務を、ドイツ領事に委託して居る。

神戸の市街及名勝

一、葺合部總説 市制施行の際明治二十二年四月から、神戸市に編入せられた市の東翼たる部分を、葺合部と稱する。此地は舊來の字である東南部の脇ノ濱、其北方の筒井更に其西北方山の手の中尾、熊内等の外、近時新たに縦横に

神戸の市街及名勝

街路を造つて、多くの町名を興へた。其内略此部の中央を貫流して居る新生田川以西は、早くから人家が殖つて、今日では空地を残さない。重なる街衢は、川の東部と共に互に竝行して東西に走つて居る。今新生田川以西の街衢を北から順序に南に數へると、生田町、二宮町、琴緒町は鐵道以北に、旭通、雲井通、小野柄通、御幸通、磯上通、八幡通、磯邊通、濱邊通は、鐵道以南にある。又布引町、丈は略南北に延びて、神戸部との境をなして居る。新生田川以東では舊來の熊内町、葎合町、筒井町、脇ノ濱町の外、熊内橋通、旗塚通、神若通、國香通、若菜通は鐵道以北に、東雲通、八雲通、日暮通、吾妻通、北本町通、南本町通、真砂通は鐵道以南にある。この内鐵道以北はまだ人家は粗雑で、耕圃として残つて居る部分も少くない。しかし築港の業進むと同時に、追々宏壯な建築も殖つゝあるから、遠からず人家稠密の街衢となるであらう。

概して葎合區は今日では市の場末で富の程度も低く、細民陋屋が多い。唯後方の山丘には遊覽の價値あるものが少くない。次に重なるものを略述しよう。

二、摩耶山 山體の大部分は武庫郡に屬するが、遊覽登山の客は殆んど神戸市

民で、摩耶詣といつて名高いから、こゝに説く事とする。山は市の東北の境に聳へ、市の後方を蔽ふて居る山脈中の最高地點で、六九四米突の標高をもつて居る。六甲山脈中六甲山に亞ぐ峻嶺で、全山森林をなし、殊に頂上附近は、老幹巨木鬱蒼して、神戸四近第一の叢林である。登路約十八町、阪路は頂上に近づくに従つて峻峻を加へ、巨杉老松道を挟んで、晝尙暗い所が多い。山頂には天上寺がある。境内は眼界開け、大阪灣を一時に集め、風光眞に掬すべきものがある。寺は眞言宗で、天武天皇の時天竺法道仙人が來朝して建立したと言ひ傳へ、今も本堂に收めて居る十一面觀音は、釋迦在世の時の鑄像で法道之を中華の西明寺道宣律師に得て將來したものだといつて居る。又境内に摩耶夫人堂がある。之も寺説には、梁の武帝が女人の難産を憐んで、佛母摩耶夫人の影像を作つて功德を修して居つたが、僧空海入唐の時に、之を傳へて歸朝し佛母堂を建てたと言ひ傳へて居る。今もこの寺を佛母山と號し山名を摩耶といふのはこの説に起因したのであらう。又山腹には古城址がある。元弘三年（紀元一九九三年）赤松則村が之に城いて居り、勤王の軍を率ゐて、この年閏二月に六波羅の大軍

を峻坂に防いで破り、更に大に之を追撃して、敵の死屍山麓より東武庫川迄累々として絶わなかつたといふ事である。尙山中には赤松則村、則祐父子の墓と傳ふるものがあり、天上寺には赤松氏に關せる多くの寶物がある。尙山の西南には市内唯一の官立學校たる神戸高等商業學校があつて、巍然たる宏壯の校舍は摩耶の翠と相映じ、市内第一等の校地を占めて居る、學校は已に記した如く内容外觀共に完備して居つて殊に校内の商品標本陳列室は見る價値がある。又私立中學關西學院も高等商業に隣接してある。

三、布引山 高等商業學校の下手熊内橋通を西に十數町進むと布引山麓に達する。布引山は葎合部に於ける遊覽の中心地で、名高い布引瀑布があり、布引鑛泉がある。鑛泉は、南麓にあつて、明治十八年以來浴場を開き、温めて入浴に供して居る。泉質は市内の他の温泉と同様炭酸泉で、浴客頗る多く、附近には數多の料亭があつて休息に便である。又附近の布引鑛泉所では盛んに炭酸水を製造して居る。布引瀧は古來殊に有名である。温泉前の坂路を稍や登ると、翠微次第に迫り、俗塵次第に遠ざかり、終に瀑前の長廊に達する。之は雌瀧で、

高さ十二間、幅二間、直下せる水は、半ばで一旦巖角に觸れ、挫折して稍や緩かに奔下し、恰も白布を垂れた様である。客は廊に憩ひ徐かに茶を喫しつゝ、全景を見る事が出来る。此の瀧から少し引戻り、橋を渡つて少し上ると又一つの瀧がある。即ち雄瀧で、高さ二十五間、幅二間、水は斷崖から奔下し、水勢前者に比して一層強烈である。更に稍や上ると鼓ヶ瀧といふのもある。之等の水は雌瀧の外は、神戸市水道の一水源であつて、一部は山の西南北野淨水構場に導かれて、市内の高層地に配水せられて居る事は、已に述べた通りである。尙瀧の下流は新生田川となつて居つて、川の西岸近くに、桃木圖書館、第一神戸中學校、臺灣總監府專賣局神戸支局等がある。

四、神戸部總説 神戸部は葎合部の西に位し、神戸市發達の中心地區で、鐵道以南は、内外の巨商大賈軒を並べ、元町通、榮町通、海岸通、辨天町、元居留地、三ノ宮町等、最も壯麗の街衢が集まつて居り、新神戸の最舊の部分で、而も現時の最も殷賑の地域である。

元町通は鐵道の直南にあつて、内地商業の中心をなし、街路廣く、内外衣服店

雜貨店、寶器店、家具店、書籍文具店、内外諸種食品店等の宏壯な商舖櫛比し百貨店頭を飾り、市内で最も華麗な所である。街路は古來の西國街道に當り、開港前の神戸、二茶屋、走水三村の地で、今も元町五丁目の巷間にある、走水神社は、舊走水の位置を明示して居る。四十年前の寒村、今や大都市繁華の中心となつた事を思ひ浮べつゝ、この街路を來往すると、誰でも等しく古今の感に打たれるであらう。

榮町通は元町の南にあつて、貿易金融の中心地である。洋館甚だ多く、貿易商館、銀行、交通業者等が集中し、其他神戸郵便局及び神戸新聞社、五州社、大阪朝日新聞販賣局、同通信部等の新聞業者もこゝに集まつて居る。

海岸通は神戸部海岸の大部を占め、殊に交通業者の大集中地で、各汽船會社、運送業者、旅館貿易商館等の和洋建築が山側に櫛比し、海岸は大小の汽船和船で掩はれて居る。こゝに税關監視部、第二第三波止場、メリケン波止場等があつて、メリケン波止場は外人の昇降が甚だ盛んである。

元居留地は榮町海岸通の東で、今は更に海岸通、前町、仲町、西町、裏町、明

石町、播磨町、浪花町、京町、江戸町、伊東町、東町、北町等の町名を興へて居る。悉く宏壯な外國商館會社等の集りで、實に日本第一の歐米式街衢といふべく、神戸の最大偉觀である。街路は極めて廣く、兩側は煉瓦を布き詰めて人道とし、中央車馬道との間には楊柳を植わ、恰も歐米の大都會に髣髴して居る。已に記した神戸税關本部はこゝにある。又居留地の海岸と東側には芝生の遊園があつて、内外人の運動に便して居る。殊に東遊園地は面積も廣く、元生田川堤の松樹密生せる丘陵を收め、大運動場、テニスコート、音樂堂、四阿屋等があつて、内外人により盛んにテニス、野球、クリケット等が演ぜられる。

次に鐵道以北は、官術學校、紳士富豪の邸宅等が多く、南より山手に順次に、北長狹通、花隈町、宇治野町、下山手通、中山手通、山本通、北野町、再度筋等の街衢が略東西に延び、唯舊生田川の流路なる加納町は南北に延びて神戸部の東境をなして居る。下山手通には縣廳、縣立神戸高等女學校、赤十字社兵庫支部神戸、稅務署等の宏壯な建築が多くあり、之より山手は土地高燥空氣殊に清淨で市内第一等の住宅地である。

五、生田神社

下山手通一丁目にある官幣中社、神功皇后攝政元年の創建で、征韓の時靈驗あつた稚日女尊を、凱旋の際其神誨によりて、海上五十狹をして祭らしめたものと言ひ傳へ、海上家の後裔は、今も市内奥平野村に現存して居る。此神社は神戸に最も關係の深い社で、始めは生田川の上流布引の砂子山に鎮座してあつたが、後今の地に移し祭つた様である。平城天皇の大同元年攝津四十四戸を神封に寄せ奉り、清和天皇の貞觀十年從一位を授け奉つたことなどが物に見え、神戸の地名も全く生田神社の神戸であつたから起つた様である。官祭は毎年四月十六日に行はれて非常に賑かである。廣瀨なる境内は所謂生田森で鬱蒼たる森林を爲し、中央に古雅な社殿があり其西方の池塘に社務所や祠堂の邸宅等がある。この森は屢々戰鬪の巷となつたので、歴史上甚だ有名である。即ち壽永三年二月一の谷の戦には、生田森は平軍の東門となつた。此月七日源範頼の率ゐる源氏の軍が、此森を攻めた時、源軍の中武藏の人河原太郎高直、同次郎盛直は、勇ましくも馬には乗らず、弓杖をついて森の逆木を上り越え先陣したが、二人共平家方たる備中の人眞名邊五郎のために、同じ枕に討た

れた。この時源軍の勇者梶原景季は、籠に梅を齧し、敵陣に突入して血戦し、父景時等もついでに駆入り、終に敵將平知盛等を走らした。今に境内には、籠の梅、梶原井といふものがあり、又河原兄弟の墓といふのも永く社の南方三宮町の巷間にあつた。又延元元年二月、足利尊氏の西走する時、楠正成はこの月十日賊を追撃して、生田宮濱に至つて軍を還したといひ、同年五月二十五日湊川の戦に、新田義貞兵庫に敗れて東走するを、四國の船手細川の兵は、紺部濱即ち生田社前の海岸から上陸し、生田森に進み、其附近で邀へ伐つて、又大に之を敗り、義貞は僅かに身を以つて逃れたのであつた。又天正八年花隈の戦の時にも生田森は屢々戰場となつた。即ちこの年三月二日には、荒木村重の兵花隈城の東門から出で、織田信長の將池田氏の生田の陣を突き、主將信輝の子之助輝政等の爲に惱まされて、終に敗れて花隈本城に退いた。次いで七月二日村重の兵更に生田の敵陣を襲ふて再び敗れ、ついで花隈本城も攻め落さるゝに至つた。(社は維新前は無論耕園の中で、松の並木は長く社前から海岸に通じ、船客水夫は多く海濱から船を捨て、参詣し、春日花鳥の好期には、松間瓢酒に酔ふて樂しむものも少くなかつたといふ事だが、今は繁華な街衢に巻かれて、唯社の南方の道路に立つて居る、破れた石の鳥居が昔を語つて居る。)

尙生田の神の裔神八前、生田の末社として、境外に祀られてある。即ち一の宮は田心姫を祭つて、北野に、二の宮は天忍穂耳尊を祭つて、葺合なる二宮町三丁目、三の宮は湍津姫を祭つて、舊神戸なる今の三宮町二丁目に、四の宮は市杵島姫を祭つて、舊花隈の地なる今の中山手通五丁目に、五の宮は、天穂日命を祭つて、奥平野に、六の宮は、天津彦命を、八の宮は、熊野椽樟日命を祭つて、共に舊阪本なる楠町に、七の宮は活津彦根命を祭つて、兵庫佐比江町にある。この内七宮は今縣社に列せられて居る。

六、花隈城址

今の花隈町なる神港俱樂部、港務部邊の地は、天正時代の花隈城の跡である。花隈城は荒木村重が築き、信長に叛するや、後に茲に據つて池田信輝と戦ひ、終に敗れて國を失つたので有名である。天正六年荒木攝津守村重、怨を信長に構へ、居城在岡に據つて叛いたが、善戦力闘一年餘の後、終に在岡城を保つ事が出来ないうで、七年十一月第二の本據花隈城に入つた。やがて在岡の殘黨や其他村重の志を扶けるものなども次第に集まり、毛利氏の援をも乞ふて、勢再び振ふ様になつた。夫で信長は、池田信輝に命じて花隈を伐た

せる事となり、八年二月から對陣となつた。此時荒木勢は花隈本城を中心として、北の方中宮の高見に高い土堤を築き、更に阪本から荒田に亘つて石垣を造つて支城とし、村重は本城に居つて全軍を統べ、村重の一族で元本城に居つた元清は、中宮の土堤蔭に砦を築いて據つた。之に對する池田勢は總大將信輝、諏訪山に本陣を据へ、今の宇治野山から安養寺山邊にかけて、信輝の部下伊木清兵衛、森寺忠勝等が砦を築いて、元清の中宮砦等に對峙し、別に信輝の嫡子之助、次子輝政等は生田森に陣して花隈の東門と對した。かくて初度の激戦は三月二日にまづ荒木勢の生田攻撃に始まつた。此時信輝、伊木清兵衛等、生田の急を聞いて來援し、敗れて逃ぐる荒木勢を追ふて、終に大手より本城を攻め本丸に迫つた。やがて、村重も殆んど危急に瀕したが、やがて元清が來て村重を救ひ、池田勢の後方から俄かに起つて攻めたので、池田勢は不意を伐たれ、勢頓に挫けて、諏訪生田の二手に分れ退散して、戦は收まつた。この後信輝は森寺忠勝等をして、私かに北手の搦手から花隈城内に忍び入らせて、城中の布置などを精細に窺ひ知り、再戦の準備に怠りなかつた。やがて再度の合戦は、七月

二日亦荒木勢の生田突撃に始まつたが、信輝、森寺忠勝等直ちに兵を出して、荒木勢を敗走させ、搦手より花隈本城を突き、一方には奇謀を設けて、村重を生田森近く迄誘出し、機に乗じて火を放ち、終に城を陥れた。村重は絶望の極自刃しようとしたが、近侍に止められて、更に兵庫築島に赴き、雑賀孫一郎の一黨に據り、砦を固めて毛利の救援をも請ふたが、西國勢の來ない内に、池田勢が四方から來り攻めたので、又支ふる事が出來ないで、村重は輕舸に乗じて安藝の方へ落ちたといふ事である。今も港務部の構内に、埋没後三百年位も経過したと思はれる五輪の石塔があるが、恐らくは村重が將士の冥福を祈る爲に花隈入城後城内の一角に建てたものであらうといふ事である。

七、諏訪山遊園

神戸部市街地の北部山本通四、五丁目にある丘陵で、實に市内第一の絶勝である。山は絶頂を盡すも僅に數町の上りに過ぎない、頂上と中腹とを切り開いた廣い臺地の周圍には鐵鎖を貫いた石柵を設け、其内部の所々に小亭を造り、別に多くのベンチを備へて休息に便して居る。園内眺望の廣く佳い事は眞に神戸第一で、全神戸市街及び港内は言ふ迄もなく、大阪灣一帯

の地域は悉く一眸の内に集められる。試みに眼を前下方に注がうか、全市八萬餘の人家は正に一對の瞳孔に入り、和洋大小の建築は雜然混立し、所々に亭立せる煙突から吐き出す黒煙は長蛇の蜿々たる様である。今殊に目立つ大建築を指點すると、直山麓には、トアホテル、神戸女學院、武徳殿等巍然として、山と高きを争ふが如くに見へ、稍や前方の正面には、縣立神戸高等女學校、兵庫縣廳、神戸稅務署等の峙立するのが見へ、更に前方海岸には、オリエンタルホテルを始めとし宏壯なる幾多の洋館が數へられる。尙少しく右方には、神戸市役所、神戸地方裁判所等が眼を奪ひ、左方には、神戸高等商業學校が市の東端に覇を稱へ、關西學院が之に副たるを見る。又港内を見渡すと、海岸には數千萬の和船が密集して、帆檣眞に林立し、其沖には大船巨舶堂々と碇を下して常に三四十隻を下らず、以て貿易の盛大を想見する事が出來る。又更に眼を沖に走らすと、葛城山脈を始め紀泉地方の連山は、天穹に眉を描いた様に見へる。若し夫れ春日之に靄霞の變態たる、冬期白雪を頂いて、旭光と相映射する様なぞを見ると、身は人家八萬の大都にありながら、眞に塵囂を脱して居る如く感

せられる。又眼を大阪灣岸に沿ふて漸次左方に回轉すると、摩耶六甲の翠微、御影、西の宮、尼ヶ崎等の弓狀の灣入を経て、微かに大阪の商市を望む事が出来、更に轉じて右方に眸を走らすと、鷹取、鐵拐、鉢伏の峯巒、須磨舞子の白砂青松を隔て、淡路島の翠影を望み、友ヶ島、紀淡海峡等も手に取る如く見へ更に其後方四國の山影濃淡相重なるのが目に映ずる。實に斯様に雄大な山海併せ得たる絶景は多く得られない所である。尙園内には桃櫻を植えて、花時の眺を助け、西部樹林の間には、諏訪明神の小祠がある。又中腹の臺地には、明治六年佛人ジョンソンの金星觀測紀念碑があつて、爲にこの臺地に金星臺といふ名を與へて居る。尙山麓には有名なる諏訪山温泉がある。浴室宏壯清潔、場内の庭園雅趣に富み、貴紳の入浴殊に盛んである。温泉の前面には有名なる料亭兼旅館たる西、中、東常盤があつて、屢々此地通過の貴顯を宿泊させて居る。尙東麓のトアホテルも最近主として外人によつて建てられた宏大な洋館で、オリエンタルホテルと共に市内最大の洋風旅館である。

八、再度山 諏訪山の西北方にあつて、諏訪山の西麓から坂路三十町許で頂上に達する。絶頂は海拔四七〇米突、大龍寺といふ古刹がある。眞言宗で神護景雲二年の創建と傳へ、行基の作といふ如意輪觀音の像を本尊として本堂に安置し、本堂の奥には大師堂があつて、弘法大師の像を收めて居る。弘法大師入唐の時、此山に登つて求法を祈り、歸朝の際再び登山したとの傳へから今は再度山といふが、舊名は多田部といつて居つた。毎月二十一日には賽人群集して雑沓を極める。此山は正平年間に赤松光範が城いて居つたらしい。正平十七年和田正武、楠正儀等攝津に入り、石堂頼房と共に赤松光範を攻め、進んで湊川に至り、兵庫の民家を焼いた時、光範多田部城に據つて固守した爲、正儀等も終に兵を退けて還つたといふ事である。山頂の背後は、花崗岩の水蝕甚しく、奇岩兀々として所々に峙ち、其間に幾多の小池を作り、山境全く俗塵を脱して心氣甚だ爽快を覺ゆる。

尙再度登山口の南方には、宇治野の丘陵があつて、丘上に神戸測候所、神戸聯隊區司令部、山手倶楽部などがある。更にこの丘陵の東なる中華會館、中宮小学校の北手塚本氏の宅地内には一古墳があつて、或は仁徳天皇の妃八田皇女の

神戸の市街及名勝

慕ならんとも云はれて居る。

九、湊東部總説

舊湊川の東部、神戸部の西で、維新前阪本荒田二村のあつた地である。今の市街の殆んど全部は、無論開港以來の建設で、舊阪本村は擴大して東北部に楠町となり、荒田村も戸口日に殖んで、西北部に荒田町となつた。この外現今鐵道以南舊湊川尻に東川崎町があり、鐵道以北には南より順次北に、相生町、古湊通、仲町通、多聞通、橋通、上橋通、福原町、宇治川町がある。右の内東川崎町は神戸停車場を始め、鐵道廳の用地大半を占め、又舊湊川口は川崎造船所が廣大の地積を占めて居る。相生町は舊國道で、其東端元町通との間にある相生橋は、市の略中央に位し、交通起算の標點で、兵庫縣里程元標は橋の西畔に立つて居る。橋は鐵道線路を跨いで架設した陸橋で、始め明治七年鐵道寮雇ノルデンステット氏の設計にかゝり、後明治二十三年複線となつた時、更に大規模に改築して現形となつたのである。長さ約十二間、高約三間半、兩端には煉瓦の支壁があつて之に鐵板を渡して橋板とし、其上に更に土砂を積み、中央は一段低くなつて居つて車馬道とし兩側は人道として居る。尙

欄干に代ふるに煉瓦壁で側面を蔽ひ、傾斜せる道路によりて、東元町と西多聞通相生町とを連接して居る。橋上の眺は頗る廣く、西南直ちに神戸驛構内汽車發着の盛況、川崎造船所の煤煙天を焦す様を見、西は多聞通の熱鬧なる街路舊湊川に通し、東は元町通、北長狹通等鐵道の南北に長く走つて居るのを見、更に北方には幾多の翠巒市の外圍を蔽ひ、洋館點々其内に散見するのが見ゆ、活躍せる市の光景が、一眸の下に集められる様に感ずる。尙橋の東畔には相生橋警察署、神戸商業會議所等がある。多聞通は元町に亞げる壯麗繁華な街衢で、巨商大賈軒を並べ人馬の往來殊に盛である。福原町は舊湊川堤の東にある遊廓地である。もと妓樓は市内各地に散在して居つたが、明治六年に令して今の福原の地に集めた。町の中央の廣い通は仲の町といつて、道の中央に溝渠があり、其兩側に柳梅櫻等の類を栽ゑて風興を添へて居る。城内妓樓約百戸、夜は遊冶郎の頓狂場となつて殊に殷盛を極めて居る。

一〇、湊川神社 市の中央大停車場で陸上に於ける旅客貨物を最も多く吞吐する神戸驛から、北に通ずる道を、東側に劇場大黒座等を見つゝ、一丁許進むと

神戸の市街及名勝

神 大 戸 観

神戸の市街及名勝

楠社の正門に達する。社は前は多聞通に面し、後は上橋通に接し、兩側は橋通の街衢で廻らされ、いふまでもなく楠正成の靈を祭つて居るのである。境内は開港前迄は坂本村に屬する一面の田圃で、唯元祿五年水戸光圀卿が建てられた一基の石碑が、數株の松樹の下にあるに過ぎなかつたが、明治の始め特に詔旨によつて祠堂を建て、五年出來上つて別格官幣社に列せられた。今では維新前寂々たる空野であつた境の内外は店舗充塞して、市の中央最も般賑な巷と化してしまつた。境内は方二町許、四周煉塀を繞らし中央には十字形に敷石の道が貫通して居る。名高い光圀卿建設の碑は、境の東南隅正門を入つて直ちに右折した所にある。碑石は高さ三尺九寸、幅一尺六寸、厚一尺、青色の和泉石で造られて居つて、表面には光圀卿自筆の嗚呼忠臣楠子之墓の八字を刻み、裏面には明人朱舜水の選文を鐫つて居る。碑石の下には龜趺があつて、幅二尺、長三尺、同臺石幅二尺、高六寸、竝に東白河石で造られ、其下に中壇があつて高二尺、幅五尺四寸四方、更に其下に下壇があつて高五尺、幅一丈四方、共に御影石で造られて居る。此下なる土中に、徑四寸八分の鏡を埋め、其裏面には三行

神 大 戸 観

に、忠臣楠姓楠氏諱正成之靈、元祿五年壬申某月某日、源朝臣光圀謹修建碑、と鑄込んである。又境内の中央北邊小高い所に、壯嚴な社殿が巍然として建つて居つて、附近には多くの花卉樹木を植ゑ、池水を穿ち、龜や魚を放つて趣を添へて居る。尙近時本殿の東側に、楠公の配の靈を移し祭つて、甘南備神社といふ清楚の新小祠を加へ、日露の役に於ける旅順砲臺の分捕巨砲等を、其前面に据わて、社殿の鎮護として居る。この外本社には正成公の甲冑、刀劍、軍旗等の遺物が頗る多い。尙境内の西南に水族館があつて、魚類其他の水棲動物を養つて居り、又所々に勸商場、露店、飲食店もあつて、稍や俗臭を帯びて居る點もある。市内の諸社寺中、參拜人は最も多くて、日夜絡繹として絶わぬ。宮祭は毎年七月十二日に行はれて居る。

尙序に楠社附近の概況を記すと、西門外は殊に俗人の雜沓する街路で、夜は殊に寄席等の爲に人出が多い。東門外には巍然たる二大洋館が竝んで居つて、社に近い方が神戸地方裁判所、この東に接して居るのが、最近落成の神戸市役所の廳舎である。この北手を數町上ると安養寺山麓に、俗稱楠寺本名廣嚴寺とい

神戸の市街及名勝

ふがある。寺は禪宗に属し、元享元年元僧明極の開基と傳へ、後世の俗説多く楠公に附會し、延元元年五月楠氏一族此寺の客殿で自盡したと傳へて居るが、信偽俄かに信ずる事は出来ない。併し昔より正成の菩提所であり、今も猶楠氏一族の遺物を藏して居り、境内にはもと楠公碑の傍にあつた古梅で、元祿年間に移し栽ゑたといふ一株もある。尙寺の前方には、私立湊東女學校、西方には縣立神戸病院、縣立神戸商業學校等がある。

一、舊湊川 已に述べた如く舊湊川は、天王、石井二川の合流地から、荒田福原の西邊を東南流し、湊東、湊西兩部の堺をなして、川崎から海に注いだのであつた。近年多聞通の西端なる舊堤から上流は、もとの川底を埋めて、兩堤と同高の平地とし、之より下流はもとの兩堤を削り取つて、舊川底と同じ平面とし、今に多くは空地として残つて居るが、東側には劇場相生座等がある。其舊上流兩堤の部は、今も舊來の松柏鬱茂して、楠公戦死の昔を語つて居る様であり、尙堤上には茶亭、自轉車練習場などがあつて一の遊園地となつて居る。古く平家時代の前迄は湊川は、舊來の川筋よりも西に偏し、會下山の麓を南に

流れ、兵庫の西を繞つて、和田岬の海濱から海に入つた様である。恐らくは清盛の時に福原の地の洪水の害を避けん爲に、舊川筋に附け換へたのであらう。この川はいふ迄もなく古戰場として甚だ名高い。元暦元年一の谷の戦の時にも戰場となり、平軍の敗將通盛はこの川邊で源軍の木村俊綱に討たれ、其墓は永く今の佐比江町の東北にあつたといふ事である。次で楠正成は尊氏の大軍をここで邀へ戦つて終に戦死し、この川の名は正成の名と共に永久に歴史に残る事となつた。今當時の戦況を概括すると次の通りである。

延元元年四月三日、尊氏は大友、少貳等の九州の大兵を率ゐて、太宰府を進發し、五月五日備後の鞆に達した。茲で評議の上全軍を水陸二軍に分け、尊氏は海を進み、弟直義は陸を進む事とし、同月十日海陸共に鞆を發向し、尊氏は途に四國の細川、河野等諸軍の來會を得て、十五日備前兒島に着き、直義も途に備中、備後、安藝、周防、長門、美作等の勢を合せ、十八日備中福山に據つて居つた新田勢を落して備前に入り、之からは海陸互に合圍の火を揚げ、互に陣の在所を知りつゝ、並び進んで、二十四日の暮方明石に達し、水軍は明石から須

神 戸 大 観

神戸の市街及名勝

磨の沿岸に碇泊し、船數凡そ五千、陸軍も明石から鹽屋にかけて十萬許の大勢が陣を取つた。之に對し官軍方の新田勢は、直義の軍が備前に入つた後三石城を捨て、更に播磨の赤松の城の圍も解いて退き、僅か二萬餘人で、和田岬に一切に小松原を後にあて、陣し、楠正成は僅かに手兵七百許で、湊川附近に陣した。直義の陸軍は、二十四日夜更に三隊に分け、大手は直義及び高師泰赤松則村等が率ゐ、山の手は、高師直等が率ゐ、濱の手は少貳頼尙等が率ゐて、進撃する事となつた。かくて二十五日の朝となつたが、午前六時頃から尊氏配下の細川の水軍五百餘艘は、和田岬湊川を左に見つゝ、東に走り、漸次生田森の海岸から上陸して、敵の背後を衝かうとした。又午前十時頃からは直義の陸軍の三隊は、山の手、須磨口、濱手同時に進撃した。殊に濱の手の少貳の勢は、尊氏の水軍と旗鼓相應じつゝ、和田岬に陣して居る新田勢を襲つたから、義貞は大敗して東に走り、生田森附近に及んだ時に、折しも生田濱から上陸した四國の細川勢に行き合つた。義貞はこゝで又負けて、僅に身を以て京都の方に逃げ落ちた。かくて寡兵を以て湊川に陣した正成は、前面には直義の本軍を始め、尊

神 戸 大 観

氏の和田岬上陸軍等の大敵を受け、背面よりは四國勢に責められ、腹背敵を受けて、大に苦戦奮闘したが、終に力及ばず、午後六時頃弟正季等と共に戦死し畿内の關門たる兵庫の地は、遂に尊氏の爲に奪はれた。尊氏等は翌二十六日兵庫を立つて。月末には其大軍京都に入り、後醍醐天皇は二十七日又叡山に臨幸せらるゝに至つた。

尙舊湊川上流の東、荒田町三丁目に古松數株集まつて、小高い森をなして居る部分がある。之は平家の盛時、池大納言平頼盛(清盛の弟)の山莊の跡で治承四年六月福原遷都の時、一時安徳天皇を奉じた所である。

一一、湊西部總説 湊西部は市の區域中最も古い市街地で、舊湊川以西兵庫の地をいふのである。兵庫は古くから發達した港市で、平清盛の此地經營以後殊に著はれ、豊臣時代から徳川時代に及んで、街衢も大に整ひ、已に一大市街を成し、商業交通の大中心となつて明治に及んだのである。維新前の兵庫市街は、今の國道以南、和田岬舊湊川尻の間の地域の大部を占め、今も人家最も稠密で、街路も錯雜して居る。國道以北及び以南の北部は明治以後漸次發達した

神戸の市街及名勝

部分で、其大部分は明治二十年以後の建設にかゝり、街路も縦横に整然と通じて居る。國道以南は舊兵庫以來の町名が甚だ多く、大部は、運河及び新川以東で、こゝに東から西に數へて、湊町、佐比江町、西出町、東出町、川崎町、北宮内町、宮内町、宮前町、鍛冶屋町、松屋町、匠町、島上町、魚棚町、小物屋町、戸場町、江川町、算所町、永澤町、三川口町、西宮内町、富屋町、鹿屋町、北仲町、西仲町、門口町、東柳原町、西柳原町、北逆瀬川町、南仲町、磯ノ町、切戸町、神明町、南逆瀬川町、濱崎通、入江通、小川通、須佐ノ通、松原通、蘆原通、住吉通等の街衢がある。又新川で圍まれた中島又出島といはれて居る域内には、船大工町、濱新町、新町、新在家町、關屋町、出在家町等があり、新川運河以西に、今出通、今出在家町、和田崎町等がある。國道以北の新街衢は、南より順次北に羽阪通、塚本通、大開通、水木通、中道通、下澤通、上澤通、松本通、大井通等がある。

右の内佐比江は、往昔務古水門の埠頭で、兵庫の港灣中最も古い船着場であつたらしい。もと妓樓櫛比し、般賑の地區だつたが、數十年以前柳原が之に代つ

て今は常人の住所となつた。其北なる舊國道筋の湊町、江川町、戸場町、小物屋町及び北逆瀬川町等は、湊西部中最も街衢壯麗、繁鬧の部で銀行、大商店等が多い、北逆瀬川の大通の西側及び東北には、有名な佛閣が殊に多い。又算所町には、劇場明治座があつて観客常に齒集して居る。

一三、新川及運河 もと今の磯ノ町の東南に、方百間許の入舟池といふがあつて、東は海に通じて小舟の入泊に便であつたが、明治七年から八年にかけて當時の兵庫區長神田兵右衛門氏の發案によりて、此池を北口として、それから西南に逆瀬川の水路に従つて運河を開いたのが、今の新川で、爾來和船の入泊に非常の便を増した。後明治二十八年更に兵庫運河株式會社が起り、翌二十九年から工事に着手して、三十一年中に新川の西南部から西南走して、和田岬の西方、苅藻川口の東方海岸に至る運河本線及び本線の西部から更に分れて、北方に走り兵庫停車場の西南方に至る支線を開鑿し、繫船料を徴して、和船の碇泊に更に大なる便益を與へた。運河及び新川は、實に神戸港内和船の集中點で幾百千の日本形船が、舳艫を並べて盛んに物貨の揚卸をして居る様は、さすが

に古來名高い兵庫の津と、舊時繁盛の程も思ひ遣られる。

一四、來迎寺 新川の北口、島上町にある。佐比江町邊から、此の邊にかけての地は、平清盛の時代から、鎌倉時代の始めにかけて埋築した所謂築島で、古來經ヶ島ともいひ、來迎寺は一名築島寺といつて居る。寺は淨土宗で本堂には、釋迦の畫像、清盛鏡の影等を安んじ、觀音堂には觀音の像を置いて居る。又本堂の前に松王小兒人柱の標石といふのがあつた。俗説によると、清盛兵庫港面風浪の難の多いのを思ひて、海面埋立築港の大工事を起したが、度々風浪の爲に埋立地は決潰して、功を奏しなかつた。夫で終に卜者の言に聞いて、海神の怒を鎮める爲に、人柱を立てる事に定め、奉行阿波民部重能は、關を生田森に設けて、行路の人を擒にし、三十人に充ちた時に、之を海に埋めようとした。時に清盛の小侍、讃州香川民部の子、松王といふもの、罪なくして海に投せられようとする三十人のものを惑んで、衆に代つて己一人海に沈み、重能等も亦石の面に一切經を書いて埋めて、漸く築島の工事功を奏したといふ事である。併しこの説は俄かに信ずる事は出來ない。信すべき記録によると築島の業は決

神 戸 大 觀

して清盛の一朝夕の事ではない。由來兵庫の港灣は、和田岬の爲に、西風には安穩であるけれども、東南風の烈しい時には、高浪岸を拍つて船の停泊に不便であるから、已に嵯峨帝以前の時代から清盛の前の頃迄にも朝廷より特に造船瀬使、造大輪田泊使等を置き、又は國司に命じて石堤を築き又は修理などさして、停泊の舟を保護した。殊に嵯峨天皇の弘仁年中、文徳天皇の仁壽年中には大に船瀬、石椋イシケラを修作した事は確實である。船瀬とは、船居の事で泊船の所であり、石椋とは、石堤を築いて風濤を障へ、其内面に船舶を滯泊させる構造のものである。其他醍醐村上二帝の時にも修造した確證がある。清盛に至つては當時宋の商船博多及び兵庫に出て來て交易し、而も清盛は居を福原に占めて居つたから、大に貿易交通を助けるために、今の來迎寺附近一帶の地に埋築の役を起したのであらう。即ち始めは清盛の私力で築造して居つたが、完成しなかつたので、清盛の請により、高倉天皇の治承四年二月には、朝廷も官符を下して、大に築造の事を奨めたが、兵亂が起つた爲に、充分に成功する事は出來ずに清盛は薨じ、後約二十年を経て、後鳥羽天皇の建久七年に至り、東大寺大和

神 戸 大 觀



神戸の市街及名勝

尙重源上人の請により、更に官符を下して、大に兵庫の港埠を修作し兵庫の築島は始めてここに完成を告げた様である。

一五、平清盛塔及眞光寺 南逆瀬川町の新川と運河の會合點の北に、清盛の塔がある。蓋し茲に清盛の遺骨を埋めたのであらう。清盛は安徳天皇の養和元年閏二月四日、熱病の爲に京都西八條で終に悶絶したが、同月七日愛宕で火葬に附し、骨は圓實法眼が頸にかけて、此國に下り、當時平氏造立の大伽藍たる八棟寺境内なる、今の塔の地に收めた様である。其後百年餘を経たる後宇多天皇の弘安九年、北條貞時が諸國を巡察して此地に來た時、今存して居る塔を建て、清盛の精靈を吊つたといふ事である。今の塔は十三層の石塔で高さ二丈六尺、臺石は方五尺、石に刻せる弘安九年二月云々の數字の銘が微かに讀まれる。尙清盛塔の前斜方に、街路を隔て、琵琶塚と大きく刻せる大なる石碑がある。之は清盛の弟經盛の長子で、敦盛の兄である平經正の碑である。經正は一ノ谷の役に戦死したが、由縁あるものが後ここに塚を築いて、其靈を祭つたのであらう。琵琶塚の名は、經政は琵琶に堪能であつたから付けたといふ事である。



琵琶塚の北須佐通一丁目に眞光寺といふ巨刹がある。寺は時宗に屬し、宗祖一遍上人知眞の開基、伏見天皇正應二年の創建といふ事であり、且は同年八月一遍上人遷化の遺跡として、時宗信徒渴仰の靈場である。寺域六千餘坪、堂宇廣大で、本堂は方六間許、阿彌陀、觀音、勢至の三尊を安置し、其外境内には開山堂、觀音堂等がある。尙門内には蓮池があつて、其畔にある金銅の釋迦の像は眞光寺の如來といつて頗る名高い。又寺から運河を隔て、少し南南逆瀬川町に同宗藥仙寺があり、寺の少し東北北逆瀬川町にある天臺宗の能福寺には、高さ一丈五尺の大佛があつて參詣者が殊に多い。この能福寺の西、眞光寺の東の地域は、延元元年足利尊氏九州往來の途次陣舎した、魚御堂の址といふ事である。

又清盛塔の直南の方の地區は、平家時代の萱御所の址と傳へて居る。蓋しこの邊は、平氏經營の頃東生田より西須磨迄の地域を總稱した所謂福原莊の中心で清盛別業の重なる建造物があつた地であらう。

神戸の市街及名勝

一六、福嚴寺 能福寺の少し東北門口町にある。寺は臨濟宗に屬し、開祖は佛灯國師、願主は木下源太と傳へて居る。此寺は、後醍醐天皇が隱岐から還幸せられた時に、御駐輦になつたといふ事である。即ち元弘三年五月六日に六波羅が陥つたとの吉報を、天皇は船上で聞き召されて、同月二十三日船上山を御發輿になつて、晦日兵庫のこの福嚴寺に入らせられたが、この日赤松則村父子は五百餘騎で參向したので、龍顏殊に麗しく天下草創の功偏へに汝等の忠戦によるなど、叡感あらせられて、一日御逗留あらせられ、供奉の行列、遷幸の儀式などを調べられて居た所に、六月一日の正午頃、羽書を頸に懸けた早馬が三騎門前迄乗打つて來て、庭上に羽書を捧げた。そこで従ふ諸卿驚いて急ぎ披いて之を見た所が、新田義貞の許から、鎌倉なる北條の根據地を覆し、高時以下一族從類皆誅に服して、東國靜謐の由を注進して來たのであつた。更に此日の暮方には河野、土居得能等伊豫の勢、大船三百餘艘で參着し、翌二日瑤輿を回らせかけた所に、楠正成が七千餘人を率ゐて參向した。そこで正成は先驅となり、天皇は勢ゆるしく京都に還幸せられたといふ事である。

尙福嚴寺の西北西柳原町には、同宗福海寺がある。開山は、圓有和尚、足利尊氏の創建と言ひ傳へて居る。

一七、和田岬 兵庫の西南に突出して居つて現今の神戸港の南界である。蓋しこの岬角は、舊時湊川がこの部分から海に入つた時、漸次河口に發達した、砂嘴に加ふるに、潮流のために漸次西方から土砂を堆積して、突出の度を高めたのであらう。岬端には今舊砲臺と燈臺がある。砲臺は文久年中、攝海防禦のため幕府が築造したもので、圓い石堡である。燈臺は、砲臺の直西にあつて、明治四年に建造し、不動赤色である。俗傳によると岬端には、已に清盛の時から燈火を點じて舟の出入に便したといふ事である。試にこの岬頭に立つて前面を望むと、海を隔て、紀泉さては淡路、四國の翠巒と對し、海波俗塵を洗つて心氣爽快を覺へる。數年前迄は、岬頭の後方は、和樂園といつて、數萬坪の遊園地をなし茶亭、割烹店、勸商場、水族館などがあつて四時、殊に夏時納涼の際などは遊覧の客が多かつたが、今は水族館は楠社内に移され、園地は、檢疫所や三菱造船所の工場社宅等となつて、多少風致を損した。

和田岬は又史上にも名高い。殊に延元元年五月二十五日の役に、新田義貞は中黒の旗を岬の小松原に翻して本隊となつてこゝに陣し、弟脇屋義助は其東北經ヶ島に陣し、湊川の正成の軍と相依つて足利の大軍に當つた。この時尊氏の水軍は直義の陸軍と共に大に義貞の軍を撃ち、尊氏の水軍は漸次に岬頭に上陸し義貞は終に大に敗れて東走するに至つた。この和田岬の戦に、義貞の部下であつた騎射絶倫の本間孫四郎忠秀が、大に射術の名譽を博ふした事は、又有名な話である。記録によると、忠秀はもと尊氏に仕へ、共に歸順したが、尊氏の叛後は、義貞に従つて、この役共に和田岬に陣したのである。二十五日朝まだ海陸相對して、接戦しなかつた時に、忠秀は單騎で進み、弓を執つて鞍の上から賊船に向つて、「將軍の船には、澤山妓女を載せて居ると聞いて居る。何か獻上して酒を侷めよう」といつて、適々魚を攫んで翔つて行く一羽の海鳥を狙つて忽ち弓を曳いて鳥の兩翼を射通して、「魚が其爪にあるまゝ尊氏の船樓に墜した尊氏も驚嘆して、一卒をして其名を遙かに問はしたが、忠秀は、更に一矢を以て、名を通じよう」と答へて、又矢竹に名を刻んだ一矢を放つたが、之は六町餘

も飛んで、鏃は船板を貫いて敵の甲に立つた。之を見た敵衆は等しく感嘆して茫然たる様であつたが、忠秀は、更に扇を揮つて、矢を亡ふのは如何にも惜しいから、之を射返せと叫んだので、敵の一人は之に應じて射たけれども、矢は陸に届かないで、賊船近く海中に墜ちて、大に笑はれたといふ事である。

一八、會下山及其附近 湊西部の北にある丘陵で、湊西區有である。今湊西部遊園として經營中に屬して居る。丘上の眺めは、諏訪山等に譲らない程で福原舊都の跡を眼下に集め、史與徐ろに湧いて來るのを覺わる。改修後の湊川はこの丘陵中を隧道によつて貫通して居る。又山の東麓には市立東山病院がある。已に記した如く近時新築した規模宏大な避病院である。尙山の西南數町には皿池といふ頗る大きい池がある。傳説によると、之は孝徳天皇の大化年間に置かれた兵庫、即ち武器庫の址で、兵庫の地名もこゝから起つたといふ事である。又池の少し南には縣立工業學校がある。

一九、湊部總説 湊部は湊東湊西二部の北、湊川の上流、天王、石井二川沿岸四近の地で、明治二十九年四月市部に編入せられた區域である。東から西に

數へて、奥平野、石井、鳥原、夢野の四箇村がある。この内奥平野は人家甚稠密で、この部の戸口の四分の三を占め、純然たる市街の形をなし、近々町名が與へられる筈である。奥平野の東端山麓には、神戸市水道の浄水構場がある。廣大な地區を取圍み、鳥原谷及び布引谷の水を集め、清淨して、市の低層地に配水して居る。構内は高燥で周圍に梅櫻諸種の花樹を植ゑ、前面は宇治野山を隔て、海を望み、風景頗る賞するに足るものがある。

二〇、湊山及其附近

天王川、石井川の間にある丘陵を湊山といひ、全山森林で蔽はれ幽邃の景に富んで居る。殊に東麓天王川の一部は激湍となつて千鳥瀧と呼ばれ壯觀である。この少し下流天王川の左岸に、天王温泉がある。慶長の昔から知られて居る炭酸泉である。こゝに金佐亭といふ料亭旅館があつて貴顯紳士の滯泊入浴するものが少くない。

又山の西南湊山小學校四近の地は、治承四年六月から十一月迄安徳天皇の御座所ともなつて居つた清盛の別墅、雪見御所の址である。

二一、夢野

西會下山、北嶋越に接し、東西十町南北六町許の高原を爲し

て居る一區域で、仁徳以前の昔は菟餓野（又は刀我野と書く）といつて居つた。

仁徳天皇前後又は平家時代の古蹟に頗る富んで居る。まづ第一には麿坂王の墳墓らしいものが、北方山地の麓、今の精神病院の後方にある。形は多少缺損して居るが、所謂前方後圓の車塚で、塚上は古木鬱蒼し、周圍の堀も一部分は存して居る。恐らくは、神功皇后凱旋の時、應仁天皇の庶兄麿坂王が、弟忍熊王と共に叛を謀り、明石海峡に皇后の凱旋軍を邀へ撃たうとせられた時、一日此地に誓符して、野猪のために噛み殺されたといふこの麿坂王を葬つたものであらう。次には牢御所の迹と傳へて居る地が、この古墳の直西北にあつて、今此地點には頽廢に近い古い平屋造が存して居つて、附近の熊野神社の神職の住家となつて居る。此處も恐らくは、治承四年六月平清盛が、夢野に口一つあきたる三間の板屋を造つて後白河法皇を押込め奉つたといふ所謂牢御所の地であらう。尙この後方山腹には、氷室の迹といふものもある。仁徳天皇時代に、氷を貯へて夏時の用に供した、當時の氷室の迹だと傳へて居るが、今は山腹の横穴様のもので、底からは清冽なる水が湧き出て居る。この邊一帶幽寂閑雅の別世

界たる感がある。この境域を少し南に下ると、熊野神社があるが、境内は老樹生ひ茂り、周囲の大半は濠で廻らし、一大古墳の観がある。或は應神天皇の御子、大山守皇子の墳墓であるかも知れんといはれて居る。又夢野の東北澗中の鳥原には、今神戸市水道の最も重要な水源たる立畑貯水池がある。狭長の池で、水色山丘の翠緑と相映じ、俗塵を離れた一仙境である。池塘に浄土宗の願成寺がある。傳説によると此の寺は法然上人の弟子住蓮の舊栖で、住蓮は平家滅亡後平通盛夫妻の菩提を弔つたといふ事で、通盛の室小宰相の塔が寺内にある。

二三、林田部總説 林田部は市の西端で、湊部同様明治二十九年四月市部に編入せられた新市街地である。中央に苅藻川即ち新湊川が流れて、之より東は舊時の尻池、西野等の地だが、今は人家密集し多くの新しい町名が興へられて居る。即ち御崎村、今和田新田、吉田新田、東尻池村、西尻池村等古來の村名の外、三石通、上庄通、中庄通、和田宮通、笠松通、小松通、濱山通、濱添通、苅藻通、正慶町、明治通、明和通、御所通、和田山通、梅ヶ香町、東尻池

町、尻池北町、尻池御藏通、尻池菅原通、眞野町、一番町より七番町に至る各番町等の町名がある。この外、苅藻河口の東南に苅藻島があつて數戸の人家もある。川より西は、海岸に舊來からの駒ヶ林村、野田村の二村があつて、其北方一帯の地は今に田畑となつて残つて居る。尙苅藻川上流の地に舊來の長田村池田村の二村がある。この部は平家時代一時福原内裡のあつた所の様であるが其内裡の址は明かでなく、或は尻池寺山の一墟を以て、土俗方四町の築垣の迹と傳へて、里内裡に擬し、或は古書により、西野（今の一番町より七番町の舊名）を擬して居る。

二三、和田神社 和田岬の後方、和田宮通三丁目にある縣社で、天御中主神を祭つて居る。社傳によると後西院天皇の萬治二年、武庫郡鳴尾浦洪水の際に其地の押照宮の神體が、此處に漂着したのを、里人が取り上げ、崇敬して社殿を營んで祭り、此地の生土神としたといふ事である。社殿は八棟造で壯嚴を極め社前に潮入の小江といふ今溝渠様のものがあつて、之に橋を架し、橋を渡れば直ちに南和田岬に通ずる。此神社は、海上鎮守の神として、舟人を始め賽客

神戸の市街及名勝
 がなか／＼多い。殊に五月二十三日の例祭は賑かである。尙この神社の西方には鐘淵紡績會社神戸支店があつて、規模宏大、内部も諸事理想的に整備して居る事は工業の條下に略説した通りである。

二四、長出神社及鷹取山 長田村荻藻川の左岸にあつて、新湊川、荻藻川の會合點に近く、國道から數町北方である。神社は事代主命を祭り、今官幣中社に列して居る。生田神社と同じく神功皇后の祭り給ふた所で、攝政元年の創建である。古記によると、神功皇后凱旋の際、御船直ちに難波を指したが、船海中を廻つて進む事が出来ない。よつて更に務古の水門に還つて、之を卜したが、此時事代主命誨へて、吾を御心の長田の國に祀れとの事であつたから、此と同時に天照大神を御誨に従つて、廣田に祭らしめた山背の根子の女葉山媛の妹長媛をして、事代主命を此所に祭らせたといふ事である。尙平城天皇の大同元年、攝津四十一戸を神封に寄せ奉り、清和天皇の貞觀元年、從四位を授け奉る等の事が物に見へて居る。官祭は毎年十月十八日に行はれる。境内は一大森林を爲し、西に川を帯び幽邃なる神境である。社殿はさほど宏壯ではないが、

清酒嚴整である。土俗此神を以て開運の神靈とし、一月一日は勿論毎月一日には、商人其他一般の士女先を争ふて早朝より參詣し、社前非常に雑沓を極める。神社より數町東新湊川の右岸臺地に第二神戸中學校がある。又神社より十數町西に崛起して居る山は鷹取山で、市郡の境上に立ち、三三〇米突の高さがある。頂上の眺は全市を雙眸の中に集め頗る佳い。西麓に臨濟宗の禪昌寺がある。寺は後村上天皇の延文中正續禪師宗光の開基で、伏見城の城門を移して寺門として居るし、尙方丈なる狩野永徳筆の畫も伏見城から移したといふ事で共に名高い。又寺の境内には多くの槭樹を植へ、秋は紅を染出して、市人の筈を曳くものが少くない。

二五、平知章碑及監物太郎頼賢墓 長田神社の南方湊川の東國道の北側長田村字小平なる六池の東南堤防一大老樹の下に平知章碑がある。今は御影石で石礎を設け、玉垣を繞らし、其中に一大碑があつて、平知章碑と筆太に刻してある。知章は知盛の子、清盛の孫である。元暦元年二月七日一の谷の戦に、知章は父と共に東門生田を守つたが、終に敗れて父と共に西走した。此時知盛

神戸の市街及名勝

等は源軍の兒玉黨十騎許に追驅けられ、長田のこの邊にて殆んど危急に瀕した折しも從兵監物太郎頼賢は、知盛の急を救はんとて敵一人を射殺したが、忽ち二人の敵は進んで知盛に迫つて全く危くなつた。知章は之を見て、我身を忘れて父の急を救ひ、兒玉黨と渡り合つて終に二人の首を取つた。父知盛は爲に隙を得て幸ひに免れ船に入つて屋島に逃れたが、知章は尙も残つて戦ひ終に此所で討死した。此時頼賢は知章の首を收めようとして、亦重傷を蒙つて戦死した。誠に君臣父子忠孝の美談として、今も地方には名高い話である。頼賢墓は知章碑の直北方にあつて、知章舊碑と共に、享保年中攝津誌の著者並河五一郎が建てたといふ事である。知章の新碑は明治二十二年の頃、尻池の有志が改築して國道の濱手に建てたのを、更に四十二年十一月兵庫電氣軌道の通路に當る様になつた爲に元の所に移し、主として同會社が費用を負擔して石礎玉垣を造り、現形となつたのである。察するにこの附近は一帶に福原内裡の焚址で、一の谷戦の時、激闘の處であつたらう。義經が越ねた鵜越の通路も此に會し、生田一の谷東西の二門及び鵜越より侵入せる源氏の三軍は、正に此附近一帶の地に

神戸の一名物

かんざらめ

進物用切手御座候

前 公 楠 ハ 店 本
 (番七八五一話電)
 口 門 西 社 楠 ハ 店 分
 目 丁 八 通 聞 多
 富 ツ 井 阪 大 ハ 店 約 特
 江 堀 北

診察時間

午前八時ヨリ十二時 午後四時ヨリ九時

◎皮膚病科

◎泌尿生殖器科

◎淋病 梅毒

神戸市花隈町一番踏切上

柳田 皮膚泌尿病科 院



神戸の菓子

御生蒸菓子各種

歐風生菓子類

煉羊羹。カステラー

紀念菓子 茅渟の海神戸もなか

立食用歐風飾菓子類

其他四季に應じ嶄新なる引菓子及び
祝餅鶴の子餅赤飯等應御注文調製仕
候

▲大宴會模擬賣店は弊店の特色▼

神戸市元町通五丁目

御膳汁粉江戸屋式善哉

和洋菓子製造販賣

江戸屋本店

電話二六二番

神戸名産 浦島蒲鉾

皇太子殿下
宮内省 御買上ノ光榮ヲ賜フ

各國博覽會ニテ金銀銅賞四十餘個受領ス

蒲鉾種々 鯛みそ
焼通し 鯛煎餅
でんぶ つくだに
和洋酒 罐詰類
玉子厚焼 玉子梅焼
其他食料品色々
商品切手種々

商 號

山重

神戸市元町一丁目(三宮停車場前)

山谷重吉本店

電話三二一九三番

支店

神戸市楠町七丁目
神戸市兵庫今出通一丁目

平家の軍を包圍したのであらう。それがためか、尙此附近には、越中前司平盛俊の墓、及び駒ヶ林に、平忠度塚と稱するものがあつて、頗る古塚に富んで居る。

神戸の沿革

一、開港以前の沿革 神戸は、開港以後大に發達し、現時の市街の大部分も、爾來約四十年間の建設に係るのは、無論であるが、市の最古部分たる今の湊西部たる兵庫の地は、古來著はれて居つて、開港前數百年間既に繁盛なる港市であつた事は、誰も知つて居る所である。兵庫は、最も古くは、務古水門(ムコミナト)(後武庫港とも書く)次では、輪田泊又は大輪田泊(後和田とも書く)といひ、清盛築島の頃から、輪田の名は廢れて、兵庫と呼ぶ様になつた様である。此地の名高くなつたのは、今から約千七百年前、神功征韓以後で、其凱旋の際、今の市内生田に、稚日靈尊を、長田に、事代主命を、又稍々東に離れた廣田に、天照大神を祀られたのは、抑々神戸發達の、萌芽とも云ふべく、此頃既に、畿内地

神戸の沿革

方の咽喉、交通の衝たる要地として、識者に重要視せられたのは、應神天皇の庶兄、麿坂、忍熊二王が此附近で、神功皇后、應神天皇を邀へ伐たうとして今の市の西方垂水地方、明石海峡に大に備へ、今の市内、夢野に誓狩して、麿坂王は野猪の爲に噛み殺され軍氣大に沮喪したのに乗じて、皇后は兵庫の地方を根據地として、終に忍熊王を撃ち平げられた史實によつても明かである。此後韓國服屬の時代には、新羅、高麗、百濟、任那諸國の貢船は、今の大阪たる難波津の船付き悪き爲か、多く務古水門に來り集り、亭館を築き、方物を陸揚して、更に難波方面に轉輸し、大陸の文明を傳ふる門戸となつたといふ事であり、朝廷が命じて造らしめられた、多くの我船舶も、同時に此港に來集したとの事である。其後平家時代に至る迄、此地に就いて、餘り多くは傳はらないが、此間、紀元千二百八十年頃、推古天皇、和田崎に御禊し給ふたと傳へ、次で三十餘年を経て、孝徳天皇の大化元年には、今の皿池の邊に、兵庫を造り、刀甲弓矢等の武具を聚め收めたと傳へ、兵庫の名も之に起因して居ると云はれて居る。後聖武天皇の頃、僧行基、輪田泊を修葺した事があるらしく、爾來も

已に前項に述べた如く、朝廷よりは屢々造船瀬使、造輪田使等を置き、又は國司に命じて、港灣の修築を行はれた様である。殊に、嵯峨天皇の弘仁年中、淳和天皇の天長年間、文徳天皇の仁壽年中、醍醐天皇の寛平年中、村上天皇の天曆年中、此事のあつた事は確實なる記録に見へて居る。尙仁明天皇の承和三年に、遣唐使藤原常嗣、小野篁等一行の船が大和田泊に寄つたといふ事も物に見へて居る。之等の事實に徴すると、平家時代以前の數百年も、矢張り此地が船舶出入の要津であつた事が推定される。平家時代に至つて、清盛が大に此地を經營したのは、明かな事實で、清盛は、實に後世に於ける此地繁榮の確實たる基礎を作つた人である。清盛は早くから、兵庫の地の海陸の便、風光の佳勝を愛して、別荘を設け、福原と云つて居つた。今の南逆瀬川町なる茅御所の舊蹟の邊は、蓋し當時の福原別荘の本部であつたかも知れない。更に清盛は、宋との交通貿易の便宜上及び京都を擾す寺院の勢力を避け、且は、平地の根據地たる西國地方に命ずるに便せん爲か、終に築島及び福原遷都の大經營を思ひ起し治承以前已に私費を以て大に築島の事に従つたが、治承四年二月以後は更に官

神戸の沿革

符を以て此業を命ずる様になつて、今の島上町四近の地を埋築し、一は内外船舶の碇泊に便し、一は遷都の地積を擴げたのであつた。當時兵庫近村の者は、埋立用木を納めたが、之等埋立木の一部は明治の初頃にも發見せられて、今も兵庫の名家神田氏に保存せられて居るといふ事である。かくて治承四年五月、以仁王舉兵の變は、遷都決行の動機となり、六月早々急遽遷都の實行を見、安徳天皇、後白河法皇を始め、公卿の一部も新都に移つた。新都及び内裏の地は何れの邊であつたか、今明かに知る事は出來ないが、新都の設計は今の湊西、林田二部の地を主として爲された様である。又内裏の跡も或は東尻池なる字寺山の地と傳へ、もと此處にあつた福原内裏分石と刻せる石標は、今も同村寶満寺の境内にある。併し又確實なる記録によると、内裏は西野の地にあつた様でもある。當時の遺跡で明かなものは、前記茅御所等の外、荒田町二丁目に、池太納言平頼盛の第址があり、夢野村に、後白河法皇を幽せる牢御所跡があり、石井村なる湊山の麓に雪見御所の跡などがある。併し遷都の時、新都の經營には、地域餘りに狭小で五條を割るに足る程よりなかつたといひ、皇居も宏壯には出來上らなかつた様である。安徳天皇は治承四年六月先づ頼盛の山莊に迎へたが間もなく雪の御所に移し奉り十一月に至つて漸く新内裏に奉じた。新都の經營は無論完成したのではなく、まだ輪奐の美を見るに至らないで、公卿共の反對に遇ひ、さては諸源益々勃興し、漸次京都に迫らうとしたので、此年十一月末俄然又京都に都を返したのである。次で翌養和元年閏二月清盛薨じ、越えて二年の壽永二年平軍源義仲の爲に、大に俱利伽羅峠に破られ、七月終に京都を占領せられた。此時、平氏の一族郎黨は走つて福原に會し、清盛の墓前に詣でて會向の煙を捧げ、一旦西國に走つた。翌元暦元年正月義仲は、源範頼、義經等に滅ぼされたが、源氏の此内訌に乘じ、平軍は此時再び福原の地に盛返し來て、一の谷にも城き茲を西門とし、生田を東門として、要害に據つた。併し二月七日、東門は範頼に迫撃せられ、西門は、土肥實平、熊谷直實に攻められ別に義經の爲に、嶋越の險より本據を衝かれ、三方より包圍せられて退路を失ひ、終に大に敗れて一族の大半は戦死し、僅かに宗盛等、安徳天皇を奉じて讚岐に逃れたが、翌文治元年二月更に義經の爲に屋島に破られ、續いて三月平氏

神戸の沿革

は出來上らなかつた様である。安徳天皇は治承四年六月先づ頼盛の山莊に迎へたが間もなく雪の御所に移し奉り十一月に至つて漸く新内裏に奉じた。新都の經營は無論完成したのではなく、まだ輪奐の美を見るに至らないで、公卿共の反對に遇ひ、さては諸源益々勃興し、漸次京都に迫らうとしたので、此年十一月末俄然又京都に都を返したのである。次で翌養和元年閏二月清盛薨じ、越えて二年の壽永二年平軍源義仲の爲に、大に俱利伽羅峠に破られ、七月終に京都を占領せられた。此時、平氏の一族郎黨は走つて福原に會し、清盛の墓前に詣でて會向の煙を捧げ、一旦西國に走つた。翌元暦元年正月義仲は、源範頼、義經等に滅ぼされたが、源氏の此内訌に乘じ、平軍は此時再び福原の地に盛返し來て、一の谷にも城き茲を西門とし、生田を東門として、要害に據つた。併し二月七日、東門は範頼に迫撃せられ、西門は、土肥實平、熊谷直實に攻められ別に義經の爲に、嶋越の險より本據を衝かれ、三方より包圍せられて退路を失ひ、終に大に敗れて一族の大半は戦死し、僅かに宗盛等、安徳天皇を奉じて讚岐に逃れたが、翌文治元年二月更に義經の爲に屋島に破られ、續いて三月平氏

は全く壇の浦に滅ぼされた。當時の戦亂に、清盛居住以後大に榮へた、兵庫の地は、無論兵燹に罹り、内裏新都共に一炬灰燼となつたであらうが、天然の良港を控へ、自然の形勝を占めた此地であるから、其後も速かに恢復して、紀元二千年代の頃は依然一要津となつた様である。而して當時の兵庫住民は、半商半農の生活状態で、中には白藤氏の如き、頗る勢力ある土豪もあつた様である。白藤氏は其家に傳へた文書によると、孝元天皇の苗裔で、延元元年二月足利尊氏西走の時、白藤彦七郎惟村といふもの、官軍に屬し、一族郎黨數十人を率ゐて、北風の烈しいのに乗じ、今の市の東隣敏馬浦から船を乗り出して、折から兵庫港灣に停泊せる尊氏の軍船を、奇計を以て襲ひ焼き、大に奇功を奏し、新田義貞から賞せられて、名の一字を賜はつて白藤貞村といひ、尙此より後家號を喜多風(又は北風と書く)といふ様になつたといふ事である。此年五月尊氏兄弟は、九州、中國、四國等の大兵を率ゐ、水陸兩方面から、兵庫、湊川に陣せる新田義貞、楠正成を襲ひ、義貞は敗走し、正成は戦死して、尊氏は此地より容易に京都に入る事が出来て、終に南北朝の分立を見る様になつた史實は、既

に前項湊川及び和田岬の條下に述べ、誰も明かに知つて居る所である。此際兵庫は再び兵火の災に罹つたであらう。而して其後又漸次恢復した様ではあるが戦國の終の頃迄はまだ維新前徳川時代の様な盛況を呈するには至らなかつた様である。併し此間足利時代にも、兵庫は京畿第一の要津として、朝鮮支那等亞細亞大陸諸國の船も時々來泊した事が物に見へる。尙兵庫の地は、鎌倉時代の始め、藤原氏攝籙家の傳領となり、一條家に讓與せられ、南北朝の亂後は、赤松、香川等の武家が其下司であつたが、應仁亂後は、細川、三好諸黨が略有した。織田信長が近畿を平定するや、此地を荒木村重に與へたので、村重は永祿十年今の神戸部花隈町なる港務部四近の地に花隈城を築き、其臣野口與一兵衛を此處に居らせた。越つて二年元龜元年より天正三年迄は村重の一族荒木志摩守村正の居城となり、此後復野口與一兵衛が據守した。當時各方の佛徒は兵力を以て信長に抗したが、西國街道の要衝に當つて居る兵庫の地は、西南の佛徒が上國に向つて、兵器糧食を轉送する中心地であつたから、信長は特に與一兵衛に命じ、兵備を嚴にして、海陸より運搬する兵器糧食を強奪させた。斯様な

神戸の沿革

譯で天正五年には紀伊の雜賀根來の一黨が出て来て、花隈城を攻め、與一兵衛は戦死して、城は一時、雜賀孫市、根來藤左衛門等に占據せられたが、やがて荒木勢は之を取り返して村重の叛時に及んだ。天正六年村重在岡城に據つて信長に叛し、戦敗れて翌七年十一月花隈城に奔り、再び此處で防戦し、八年七月終に池田信輝に攻め落され、更に兵庫築島に走つて雜賀の黨の助を得て一時防いたが、勿論力及ばなかつた事は、前項花隈城址の條下に説いた通りである。花隈の戦の後、兵庫四近の地は、池田輝政が管し、豊臣秀吉が信長に代つて天下を一統してからは、増田長盛、片桐且元等が統轄した。徳川氏の世となつて領主屢々變じ、一時尼ヶ崎城主青山氏の所領となり、更に戸田氏の所領となつたが、第十代將軍家治の明和年間以後、兵庫は幕府の直轄地となり、開港の時に及んだ。

兵庫が特に繁盛になつたのは、豊太閤大阪築城後である。此時以後徳川時代に亘り兵庫は大阪の外港として、大阪の副市として、諸國廻漕の船舶は盛に往來し、四國、九州、中國、畿内地方の海陸産物は盛んに集散せられ、旅客亦四方

より集り戸口日に蕃殖し店舗月に鱗列し、街形大に成つて有名なる商業市となり畢せた。かくて今を去る約百二十餘年前なる、光格天皇の初世天明八年には已に戸數五、五〇九(内家持二、四四一軒、借家三、〇六八軒)人口一九、五八八(内男一〇、二七〇人、女九、三二八人)市坊の數四五を數へた。尙此前年に於ける兵庫の狀勢を推察するに足る各種統計を略示せんに、神社一一箇所、寺院三〇箇所、諸問屋一二一軒、雜穀仲買一二五軒、煙草仲買七三軒、干鰯鹽仲買七〇軒、生鮑仲買一三軒、素麵業者二五軒、焚湯業者三三軒、茶屋株二五歌舞伎定座一箇所、津民所有の船舶總數八四三艘、内早船二四艘、渡海船五八艘、茶船三二九船(此内煮賣船最も多く一九三艘、次で魚賣船六九艘)、漁船七九艘、小漁船四一艘、小宿乗船一〇六艘、人乗船五九艘、荷物通船六〇艘、通船五〇艘、手操船七艘、休船三〇艘といふ事である。當時兵庫の區域は、維新當時と大差なく、沿海一里四町、市街の幅員一九町、東は湊川を界とし、西は柳原を劃つて、之より南方和田岬に近く延び、市街を、北濱、南濱、岡方の三區に大別した。北濱は、北東沿岸の地で、東川崎、東出、西出、川崎、北宮内

宮内、宮前、松屋、鍛冶屋、匠、島上の十一箇町を含み、南濱は南西沿岸の地で、船大工、關屋、新在家、出在家、今出在家、和田崎の六箇町を有し、岡方は背面を總稱して、湊、佐比江、永澤、江川、西宮内、鹿屋、富屋、算所、西大路、木戸、木場、小物屋、北仲、南仲、切戸、新、磯ノ、魚棚、鹽屋、鳥屋小廣、細辻子、神明、逆瀬川、東柳原、西柳原、三川口、門口の二十八箇町があつた。西國街道は東、湊町總門から入つて、江川、木戸、木場、小物屋、北仲の諸町を通り、之より直角に折れ小廣、神明、逆瀬川、東柳原の諸町を經、西、柳原總門から出た。湊町總門から湊川堤防迄は一町餘で、街道の東南に佐比江があつて花柳の巷であつた。尙市街の周圍は、溝渠で繞らされて居つて外廓といひ、東西の總門の外、始めは幾多の小門もあつた様であるが、之等の小門は皆、明和以前青山氏所領の時に取り拂つたと傳へて居る。次に維新開港前の神戸地方の状況を見るに、兵庫の東界湊川は、平素水もなく又架橋もなく、往來の人は川底を渉るのであるが、降雨出水の時は、濁水滔々として渡る事が出来ないから、西より來た旅客は兵庫に、東より來た旅客は神

戸に滞留して減水を待つたのである。川の附近は滿目蕭寥、唯堤上の松籟が波打際の濤聲と和するのを聞く許りであつた。之より十町許東、西國街道が一漁村に入る迄の間は、水田菜圃相連つて、其盡くる所に數竿の漁網高く夕陽に曝されたのを見、楠社の如きも、湊川堤上より東五六町の西國街道に立てる、楠公の墓と記された標石から、畦道を數町行くと、赤松十餘株叢れる中に一基の墓石が立つて居つたに過ぎないで、其北方に坂本の寒村が見へた。尙湊川堤下より街道に岐れて、斜に田圃の間を通する一條の捷徑があつた。之は兵庫から神戸村に赴く間道で、其極る所に一區の墓地があつて漁民の共葬地として居つた。此東北には、再度、摩耶、六甲等の諸山翠微を凝して、抱くが如く穰々たる田圃を包んで居つた。又街道から、遠く東南を望むと、近く眼界を遮るものとはなく、海波渺茫、白帆點々、款乃の聲、幽かに耳朶を掠めるといふ様な、雅興勃々たる状況であつた。かくて此寂寥たる街道を、更に東すると人語歴落、炊烟迷維の走水村があつた。今の繁鬧たる元町通五丁目の邊だが、當時は人家僅かに百四十戸許、次で東に二ツ茶屋村といふ三百戸許の村があり、此

東に神戸發達の中心地たる神戸村があつた。恰も今の元町通一、二丁目邊で三村の内戸口最も多く約五百戸許もあつた。神戸の名は無論、古昔、生田神社の神戸であつたから起つたであらう。又湊川の戦に四國の細川の軍は、此海岸から上陸したと傳へられて居る。併し特に神戸に就いての重要な史實は、開港當時迄あまり傳はつて居ない様である。維新前神戸、二ツ茶屋、走水の三村は共に幕府の直轄地で、古より所領沿革は、兵庫と大なる變りもなかつたらしい西國街道は此三村の中央を貫いて、街道の兩側には、僅かに地を穿つた細く汚い溝を隔て、粗陋の家屋が軒を列ねて居つた。其多くは茅葺の平屋で、神戸村でさへも二階造の家は、僅かに指點し得るに過ぎなかつた。唯街道の南、海岸近くに十數棟の酒造庫が長く續いて居つたのが、せめての見映いであつた。住民の多くは、農業に従事して居つたが、問屋、酒造家、精米商、小賣商なども少しはあり、海岸には水夫、漁夫の家も少くなかつた。料亭、旅舎の類は、極めて少なく、三村中唯二三戸で、村家に珍客が來た時には、態々兵庫に走らないと變應の酒肴を調へる事が困難であつた。尙西國街道も當時は幅員甚だ狭

く、旅客人家の前を通ると、路傍の牛小屋から、突如として飼牛が角を衝き出し、端なく一驚を喫するといふ様な状態であつた。

尙序に維新前に於ける神戸附近の略況を記述しように、當時は、神戸村の東に生田川が流れ、北隣に生田宮村があつた。其樹木鬱蒼たる生田神社の前から、今の居留地の中央を貫いて、海岸に達する八町許の所謂生田の馬場の堤塘は、梅櫻其左右に聯栽され、海に盡くる所には一基の華表と、神燈臺があつて花時は「ばばちやく」と云はんすけれど、こんなばばでも花が咲く」と、里人が、瓢酒に酔つて謠つた名所であつた。尙又生田川の東、西國街道以南及び沿道には小野新田、中村、脇濱村が斷續し、西國街道以北には、生田、熊内、瀧寺、中尾、筒井等の諸村があつて、茅屋點在し、雞犬の聲が僅かに相聞いた。其戸數は、小野新田農家十三四戸、酒造倉八、九棟、中村農家二十餘戸、脇濱村農家漁戸七十餘戸、熊内村水車業者數戸、農家數十戸、中尾村農家二十四五戸、筒井村五十餘戸、といふ様な状態であつた。又神戸、二ツ茶屋、走水三村の北方及び西方の諸部落は、北野村民家六十餘戸、城ヶ口村十七八戸、中宮村六戸、

花隈村五十餘戸、宇治野村三十戸許、阪本村六十戸許、荒田村三十餘戸、奥平野村百餘戸、石井、鳥原兩村各三十戸許、夢野村亦三十戸許といふ如き有様であつた。此の如き寂漠たる神戸四近の地が如何にして現時の如き繁盛を見るに至つたかは、更に次に略述しよう。

二、開港當時の狀況

幕末外警頻りに至り、殊に嘉永六年六月、米國使節ペルリ來航以來は、重大なる外交問題を惹き起して、益々危急を告げ、朝廷と幕府と説を異にし、攘夷、開港の二論、天下に喧しく、殆んど拾收すべからざる様な状態となつた。兵庫開港も實に此時以來の大問題であつたのである。抑々兵庫の開港を始めて強ひたのは。米使ハルリスで、安政四年十二月二十五日、幕府の全權委員とハルリスの間に議定した假條約に、始めて兵庫開港の事を定めた。次で翌安政五年六月二十日、大老井伊直弼が終に勅許を待たずして、ハルリスの請を容れて調印した所謂安政假約條によつて、兵庫は愈々、西曆千八百六十三年一月一日(我文久二年十二月)を以て開港と定められた。尙米國の外、和蘭とは同安政五年七月十日を以て、露國とは同年七月十一日を以て、英

國とは、同年七月十八日を以て、佛國とは同年九月三日を以て同様の條約に調印し、同じく同期兵庫開港を之等の諸國に約した。かくて翌安政六年五月二十八日、即西曆千八百五十九年七月四日、假條約に定めた期日通りに横濱、長崎函館三港を開いたが、朝廷は飽くまで鎖國攘夷を主張し、其間を遊説せる有志の徒は、過激の言論を逞ふし、形勢次第に不穩に、人心動搖し、暴漢、浪士各地に横行して、外人を殺傷し、公使の居館を襲ふなどの暴舉を敢てしたから、此上約束通りに、兵庫、大阪、江戸等を開いたならば、どんな事變を生ずるかも知れないといふので、文久元年の末幕府は使を歐米に發して、前記五國に兵庫等開港の延期を求め、關稅等の不利を忍んで、西曆千八百六十八年一月一日即我慶應三年十二月七日迄五箇年間延期の許諾を得た。併し此後とても、國內では、幕府の遠勅を責め、開港の不可を論ずるもの極めて多く、殊に薩藩の如きは、帝都に近い要港たる兵庫の開港が、甚だ不可なる事を主張して居つた。かくて攝海防禦の議は、當時最も重要な問題として、朝廷幕府の間に唱導され、文久三年四月二十一日、上洛中の將軍家茂は、其實見をする爲に、京都か

ら大阪に下つて蒸汽船に乗り攝播一帯の海濱を巡視して、同月二十三日兵庫の津に上陸して、神戸村の東海岸、小野濱に、床几を据ゑ、海軍營所設置の地を指畫するに至つた。此時ニツ茶屋の土民で、神戸の濱即今の居留地南岸東税關の地に、船据場を設けることに全財産を抛つて盡力した、網屋吉兵衛は、將軍に拜謁を賜はつたといふ事である。

神戸へ海軍營所を設ける議は、幕府の名臣勝安房守義邦(安芳)が建てたのであつた。義邦は夙に蘭人に就いて、海軍一切の學術を修得し、安政七年正月幕府の條約書交換の使節が米國に赴いた時自ら我軍艦成臨丸を率ゐて、外人の力を借らず獨力始めて太平洋横斷を敢てした人、其知識と議論とは、優に當時の有志家に數歩を擡でて居つて、此時海軍奉行の重任にあつた人である。當時彼は建議して、「規模は須らく大ならねばならん。海軍を擴張し、營所を兵庫と對馬とに設け、尙一を朝鮮に置き、終に支那に及ぼし、三國合縱連合して、以て西洋に抗せねばならん。」といつた。かくて將軍小野濱巡視の翌二十四日、彼は神戸村海軍所取建御用、兼攝津防禦掛を命せられたが、其後熱心事に當り、寄宿

所を造り、訓練所を設け、西南諸藩勇壯の青年を教練して、大に海軍の振興を圖つた。翌元治元年攝海防禦の實を擧げる爲め彼の指揮の下に造りつゝあつた和田岬、川崎、神戸、西ノ宮、今津五箇所の砲臺が出来上つたから、教練を加へた各藩の少壯を以て之が守備に充てた。斯の如くにして、神戸は海軍の大根據地と爲らうとして居つたが不幸にも元治元年十一月、義邦は、幕府の爲に、長藩に通ずるといふ様な嫌疑に罹つて、江戸に召喚せられ、此大業は全く瓦解に終つた。當時海軍局は生田森の東南、舊生田川西岸に沿ひ、大阪街道に臨める邊に建設せられ、操練所は、生田宮濱船据場の東部即今の居留地内の東域に設けられて居つた。

義邦が海軍營所經營の内に、文久三年五月以後の長藩の外船砲撃、元治元年七月蛤御間の變、同八月、英、米、佛、蘭、四國聯合艦隊の下ノ關砲撃事變等があり續いて征長の役が起つた。此間兵庫の地は、京都、大阪と共に、志士浮浪の集まるもの最も多く、物情騒然たる様であつた。次で翌慶應元年九月十五日、突然、英、米、佛、蘭、四國の軍艦九隻隊伍整齊兵庫港内に投錨し、兵庫の開港を迫

り、長州の征伐を援けようと申し出た。兵庫神戸の人民は、之を見て驚く事限りなく、今にも戦争が始まるだらうなどと安き心もなかつた。蓋し四國より見れば當時我國內は、攘夷論尙益々盛で、幕府は内治にのみ鞅掌して、開港の準備等は少しもする事が出来ないのみならず、既に開市した横濱港さへ閉鎖しようとの談判を開いた程であるから、此上期限が来ればとて果して、兵庫、大阪等を開市するや否や大なる疑問である。而して將軍は前年來西上して、京攝の間にあるし、閣老も亦多く西上して居つて、江戸では大事を辨することが出来ないから、斷然攝海に入航して、直ちに將軍に向つて談判し、猶要領を得ないならば、進んで朝廷に迫ることに決し、終に突如横濱を去つて、此日兵庫に入港したのである。幕府の閣老も蒼皇大阪から、兵庫に来て、兵庫先期開港の事を内諾して、軍艦の速かに攝海を去るべきことを告げた。無論先期開港の事は將軍の後見慶喜も許諾しないのみならず、朝廷は薩藩の兵庫開港不可の上奏なごもあり、十月五日を以て、安政假條約は修正を命じて大體に於て勅許の旨仰せ出されたにも拘はらず、兵庫開港の義は差止められた。併し幕老は同月七日

四國公使に條約勅許の旨を告げ、兵庫開港は約定の日限に開く積なる由を申し遣はして、横濱に向つて去らしめた。

續いて慶應二年征長再度の役は、幕軍の敗北に終り、八月十九日將軍家茂大阪に薨じ、十二月五日、慶喜將軍に任せられ、朝廷に於ても、孝明天皇は十二月二十五日崩せられて、翌三年正月九日、今上陛下御踐祚あらせられ、世は一層の混亂を加へた。折しも兵庫開港の慶應三年十二月は、益々迫つて來、外國公使等も其準備を促す事日に月に急であつたので、慶喜も三年二月大阪に下つて佛、英、其他の公使等にも面接し、頻りに兵庫開港勅許の議を奏問した。朝廷では依然諸藩諸公卿の大反對があつたが、時勢は到底諸外國と親睦を結ばねばならん機運に達して居るので、終に此年五月二十四日を以て、兵庫開港勅許、條約結改取消の旨、仰せ出され、多年の大問題であつた兵庫開港の事は愈々決着を見るに至つた。之と同時に大阪開港も決定し、共に急に開港の準備に取掛る事となつた。

當時英人は、特に居留地選定に盡力し、各國使臣と協議の末終に、灣港最も深

く土地も平潤で、既に船据場の設けもある、生田川以西神戸村東部の海岸地を居留地とする事に決し、大阪町奉行で、兵庫奉行兼務の柴田剛中は、ロンドンより送附せる居留地々割繪圖によつて起すべき居留地土工一般の工事を當時の神戸村里正生島四郎太夫に司らせる事にした。此時居留地として收めた總面積は、二五町八段四畝一六步、其内、宅地一三町三段四畝一步、道路溝渠地一二町五段一五步、土工の總費用は二二一、七八〇餘兩の豫算であつたといふ事である。此後も朝廷幕府の軋轢は益々甚しく、形勢日に急に今にも内亂が起る様に見へたので、英、米二國は、之が爲に兵庫開港の條約期日に違ふかも知れないと危ぶみ、兵力を示して條約の履行を促さうとし、常に軍艦數隻を灣内に入れて、開港準備の動靜を窺つて居つた。奉行柴田等は、銳意力を準備に盡した結果、開港期日の前に、運上所今の税關建設を終り、倉庫三棟も落成し、波止場三箇所も略ぼ出來開港商社も設立せられたので、期定通り十二月七日、即新曆の明治元年正月元日、假りに開港の式を擧げた。當日碇泊中の英、米諸國の軍艦は、各二十一發の祝砲を放ち、各國領事は、其僑居に國旗を掲げて祝意を

表した。かくて内外の商賈は、まだ來て貿易するには至らなかつたが、人氣は一般に引立つて來た。神戸村の東部海岸に建つて居る、和洋折衷の宏壯なる運上所は、硝子板で張つて幾多の障子に日光が反射して輝々たる光彩を放つて居つたが、神戸兵庫四近の人民は、皆珍らしがつて「ビードロの家」といつて、日遠近より老幼男女相率ゐて來觀し、當時流行の「い、ぢやないか」を唱へたといふ事である。

之より先、慶應三年十月十四日、將軍慶喜政權を奉還したが、神戸開港の翌々日十二月九日に至つて始めて維新の大號令が發せられ、明治革新の業は正に始まつた。今迄は幕府直轄の民、而して今や王政治下の民たる事に決した兵庫神戸の地は由來西國諸藩の本陣多く、勤王の諸士が多く往來したから、民心は早く幕府を離れて、朝廷に嚮つて居つた。奉行柴田を始め、幕府の官吏は、將軍既に大政を返上した上は、何時江戸へ引揚の命が下るかも知れんと思つて、最早其任務に執掌しないのみならず、却つて手代、奉行附別隊組兵士等は、無賴の惡徒と共に、市中を横行し財物を掠めるに至つた。殊に神戸の住民は其暴掠

を蒙むる事が日に甚だしいので、年寄役吉田七郎兵衛、高濱太右衛門、船井長兵衛等は、別隊組兵士等の暴行防止の策を講じ、十二月二十一日英艦入港の由を聞知して居つたから、僞つて兵卒等に、薩士小松帶刀、長士木戸準一郎、伊藤俊介等が、京都の御用で、軍艦に乗つて、日ならず來港する筈で、既に御用宿手當所調方の命に接したと告げた。始めは彼等も信じなかつたが、果して二十日になつて英艦黒煙を揚げて入港したのを見て、今更士民の言の眞であつたの信じ、周章狼狽して逃げ去り、奉行柴田剛中代官齋藤洪督等も、亦蒼皇として船に乗つて遁げ、幕吏の隻影を認むる事が出来なくなつて兵神の地は、一時無統治の状態となり、各家各人自ら衛つて、新統治者の來るのを待つた。已にして慶應三年は暮れて四年の正月を迎へたが、正月早々鳥羽伏見に於て朝幕の激戦が始まり、愈々砲煙彈雨の大活劇が演ぜられる様になつた。此時兵神の地は西國諸藩の兵士の上京するもの、京阪諸藩邸の使臣で、情報を本國に齎すものなどの往來、日夜繼續して居つた。正月十一日には、備前藩の重臣日置忠尙の從兵が上京の途次、兵庫で晝食を喫し、午後一時頃三宮に差かゝつたが此

時、滞留の英人三名其行列を横断しようとした。そこで前列の兵士は之を制しようと思つて、槍を擧げて威嚇した。時に一人の英人は、衣囊から小刀を執つて兵士に抵抗しかけたので、兵士は怒つて其一人を斃し、尙一人を傷けたが残る一人は海岸に走つて、急を碇泊中の軍艦に報じた。英、米の軍艦は前年來滞泊して居つたが、之を聞いて直ちに數隻の小艇を以て、陸戦隊を上陸させた陸戦隊は直ちに小銃を以て生田に屯して居る備前兵と會戦したが、備前兵は衆寡敵せずして東に敗走した。併し英、米等の軍艦は、皆戦闘準備を調べ、陸上には、市中に木柵を構へ、騎馬で巡邏戒嚴し、出入のものを神戸兩口の柵門に監視し、兵士及び帶刀者の通行を止め、其上、港内在泊の諸藩西洋形船艦を悉く抑留して、一時占領の状態を示した。其實戰準備の快速、さては俄然起れる銃聲に、神戸の住民は悉く驚愕して度を失ひ、老幼東西に叫奔し、壯者は家財を近村に運び、婦女老若を遠隔の農家に託するなど、闔閭騒然たる有様であつたが、幸に此夜十時過長州藩兵三百人餘、船に乗つて大阪から出て來て、兵庫神戸警衛の事に當る事となつた。此時英米二國の兵は、備前藩兵が大舉して復仇

に來たものと誤認して、將に發砲しようとし、長兵が其然らざる由を告げても容易に信じなかつたので、長兵の中にも、怒つて其無禮を懲さうと主張する者もあり、騷擾更に一層を加へた。時に長兵の隊長井戸小太郎は長藩本陣專崎彌五平方から、同藩の定紋を印した高張提灯一對を取り來らせて、之を掲げて長藩の兵士である事を證し、尙彌五平の宅で、長谷川爲治の通辯によりて、英國士官と談じ、漸く外人は備前藩兵でない事を諒した。併し英、米二國人は、斷じて此地の占領を解くを諾しなかつたので、長兵は已むを得ず、奥平野祥福寺に退いて宿衛し、兵庫其他の警衛に當り、非常を戒めた。

此時に當つて、朝廷は徳川氏征討の令を發し、三道東征の師は、正に錦旗を東風に翻した。併し新政府は、まだ諸外國に對し、王政復古、徳川氏政權返上の事を告げなかつたので、新政府の參與、兼軍事參謀兼外國事務取調掛東久世通禧を使臣とし、諸外國使臣に國書を交附せしめた。そこで通禧は、參與岩下佐治右衛門(方平)同寺島陶藏(宗則)徴士伊藤俊介(博文)同中島作太郎(信行)同岩下清之丞、同喜多村慶次等當代傑出の名士と共に、正月十四日兵庫に來た。翌

十五日神戸運上所で、當時大阪居館を去つて神戸に居つた所の、英國特派全權公使兼總領事パークス、佛國全權公使ロッシユ、蘭國公務代理總領事プロック普國代理公使ブランド、伊國特派全權公使トゥール、米國辨理公使ファンケルポルク、六人に面會し、次の國書を附與して、舊約を訂した。

日本國天皇、告諸外國帝王及其臣人、嚮者將軍徳川慶喜、請歸政權也、制允之、内外政事親裁之、乃曰、從前條約、雖用大君名稱、自今而後、當換以天皇稱、而諸國交際之儀、專命有司等、各國公使諒知斯旨、

慶應四年正月十日

御 諱

之實に 今上天皇陛下の、外に對する親政の始めであつたのである。此日併せて通禧は、英國公使パークスと三宮英人殺傷事件の交渉談判を開いたが、パークスは、當時の我國情を能く知悉して居つたから、別に難題を提議せず、唯本犯者を嚴罰して、將來の鑑戒とし、政府は宜しく謝情を明かにする處決あるべしと告げて、即日穩かに神戸の占領を解き、陸戰隊を引き上げ、抑留の船舶を解放した。次で二十一日此事件は審理を遂げて、稟准を經、各國公使に本犯者

神 戸 大 観

日置忠尙の臣瀧善三郎正信を國法に照して自刃せしめ、政府は追て各國へ謝狀を贈るべき旨を通牒し、二月九日英國官人二名、伊藤俊介等立會の上、兵庫永福寺に於て正信を屠腹せしめて、事件全く落着した。

此後も神戸兵庫の新政は暫く東久世、岩下、寺島、伊藤等の手に監せられ、正月十五日、兵庫島上町諸問屋會所を假事務局と定め、將に新政の施行に従はうとしたが、已にして十九日、事務局を兵庫切戸町なる舊幕府大阪奉行所所屬勤番所に移し、兵庫市中村々取締、及び公事訴訟等總て申出づべき旨を公示した併し幕府の官吏は前月以來逃げ去り、地方一般無規則で、百般の事務悉く創始の狀態に屬し、施設の方面頗る多岐で、殆んど着手の前後緩急を決するにも苦しむ程の有様であつたから、施政の秩序が立ち、吏員の任命がある迄は、依然舊來の儘、名主年寄等が公務に携はる様命じた。殊に神戸は居留地もあつて、前月開港以來外人も在留して居るから、外人の保護、貿易開始の準備は、焦眉の急に迫つて居つたので岩下、伊藤等は専ら神戸方面の施設に留意して、兵庫同様各町村の舊例によつて、庄屋年寄等をして公務を取扱はせ、開港事務の補

神 戸 大 観

助に力を盡させた。ついで正月二十二日、兵庫鎮臺が置かれて、東久世通禧其都督に任せられたが、間もなく二月六日兵庫裁判所と改まり、通禧又之が總督となつた。此頃庶政稍順序を得、歸降せる舊代官手代及び一般官吏志望者から其技能と經歷によつて、始めて官吏を任用し、内務は寺島、喜多村重に其任に當り、外務は伊藤、中島専ら其局に當り、裁判所全般の大綱は東久世及び岩下が握つた。

運上所は、一月十九日御用掛を設け、同二十八日外國船改役等を任命し、二月五日を以て各國領事に通牒して、愈々開所し、翌六日輸出入荷物改役を定め、兵庫裁判所の外務掛も開所の日から此處に移つて、内外貿易の稅務を主管する本局となつた。之即今の神戸稅關の前身である。此時、更に西の町海岸に商家を購つて一局を設け、本局を東運上所、新局を西運上所と稱した。次で閏四月新政府は、大に官制を改革し、地方を分つて府藩縣の三治とし、直轄地たる府縣には、政府の官吏たる知事を置いて治めさせ、舊來諸侯の領たる藩は、暫く依然舊に依つて諸侯の治に任せた。此に於て五月二十七日切戸町なる兵庫裁判

所は、兵庫縣と改稱し、伊藤俊介其最初の知事に任命せられて、内外の政務を總理し、東條慶治は兵庫縣判事を拜命して、専ら内務の任に當り、中島作太郎も同じく判事として、外國事務の主任となり、六月に入つて田中顯輔(光顯)も亦兵庫縣權判事として來任し、尙判事試補及び運上所司長も任命せられ、官吏の勤務時間も午前九時出仕午後五時退出と定められ、官吏の賄賂を受けるのを嚴禁せられ、庶政是より大に擧る事となつた。此間縣廳舎も、新たに、阪本村に建築せられ、九月十八日、開廳の式を擧げ、三月以來東運上所より神戸總會所(今の神戸小學校敷地)に移つて事務を扱つて居つた外務係も、此に移つた。次で十一月一日、神戸、二ツ茶屋、走水三村を合併して神戸町の名稱を與へ、次第に秩序的進歩を爲す事になつた。

尙明治元年に於ける神戸發達上注意すべき經營は、運上所前灣の浚渫、福原遊廓設置、新街道の開鑿、楠社造營の着手、明親學館の創設、神戸病院の建設、神戸大阪間汽船航行の開始、獄舎の建設、湊川橋の架設等である。運上所前灣は、神戸港の東極、元神戸村の船入場舊幕府の海軍營所船渠の地で

總て石垣を以て之を繞らして居つたが、居留地東渠から流出する砂石と、暴潮が灣口から簸揚する土砂の爲に、船路梗塞して、甚不便であつたから元年二月から五月に亘つて浚渫の土工を行つた。此後も同年八月、三年九、十月、四年二、三、四月、五年六、七月、六年八月等再三浚渫の事があつた。

福原遊廓は、今の東川崎町、舊御用邸近傍を劃して設けられ、元年十一月の頃から開業され、二十餘軒の妓樓の外、南京茶屋といふ支那人遊興の取持を爲すもの、及び藝妓檢番所も設けられ、兵庫柳原と盛衰を競ふ状態となつたが、明治四年に至り、鐵道布設の爲に、遊廓移轉を命せられ、當時人跡の絶えて居つた舊湊川堤防の東、西國街道の北手數町の荒涼の地に漸次に移り、後追々榮えて終に今日の福原となつた。

新街道の開鑿は、當時外人保護の必要上、神戸三村の周圍には、幕府の建設した柵門十四箇所の外、新たに、貿易荷改の必要上、民費で建設した柵門三箇所を繞らし、長兵に尋いで薩兵が來て、之等の諸柵門を守り、元年三月三日以後は、三村内に官吏及び警衛兵士の外の止宿を禁じたのみならず、生田神社前か

ら關門内の通行を禁じ、行旅をして、神戸外の道路を取らせる様にしたので、其不便を救ふ必要上、生島四郎太夫の建議を容れ、生田社前から北方山手に上り、西に進み、宇治野川の岸に出る新道を開き、四月一日竣工したのである。此新道はもと斷續して居つた小徑を幹線として、生田、北野、城ヶ口、花隈、宇治野の諸村を連結する幅四尺、長さ一、七四二間の西國往還の新路であつたが後二年二月運搬の便を増すため、幅を三間に改修した。其後五年、山麓に多くの道路を開き、本道は不用になつたから、後神戸町民に拂下げられ、今は多く其形跡を失つたが、四宮下、高島別荘下の東西に通ずる間路は、其跡形の一部である。

楠社の造營は、元年四月始めて朝廷より、神號追諡、社壇造營、金千兩下賜の旨仰せ出され、次で兵庫の北風莊右衛門等、楠社造營御用掛を命せられて、社の劃定等を爲し、二年五月二十五日祭典執行の際は廟側に假神殿を設け、翌三年六月太政官より社殿造營の事は兵庫縣に委託せられて、改めて金參千圓下附の命があり、又皇族、府縣諸官員、諸藩等より續々獻金或は建築材料獻上等

の擧があつて、四年正月よりは更に楠社造營掛の官員を置き、二月より兵庫、神戸及び近接の諸村は夫役を出し、盛に造營を始め、五年四月七日上棟式を行ひ、同年九月二十三日造營全く落成し、此間五年四月二十九日、社號を湊川神社と賜ひ、別格官幣社に列せられたのである。

明親學館は、兵庫神戸の地に於て、寺小屋的教授所以外、眞の學校として起つた最始の者で、元年四月兵庫の神田兵右衛門、北風莊右衛門、安田總兵衛等の建白により、兵庫學校の名のもとに、舊幕府の設けた函館物産會所を學館とし、姫路の儒者菅野狷介を教頭として、六月十三日開校せられたが、九月校舍を切戸町なる舊縣廳に移し、校名を明親館と改め、教師を増聘し、多くの幹事も命ぜられて、漸次完全に赴き、五年三月に至つては、時勢の必要上、従前講じ來つた漢學丈で満足せず、英、蘭兩語にも通せる佛人リユ、トロンクハを雇ふて教師とし、英語の研究をも始め、尙此月更に學館を兵庫町會所に移した。已にして此年七月學制の發布があつて、各地の學校は此新學則に據り、上京設立すべき事となつたから、別に縣廳に於て元年八月以降設置して居つた神戸洋學校

と合併し、兵庫學校として、尙存置したが、翌六年六月に至り、學校維持資金も充分ならず、新學制に則り難い事情もあつたので、終に廢止する事となつた。

神戸病院は兵庫裁判所外務局の命により、元年四月、森龍玄、遠藤謹助等病院掛となり、創設に着手したが、敷地は瀬鴻莊右衛門の寄附に據り、建設費の大半は、有志の義捐に據り、宇治野村(今の下山手通八丁目、舊縣立病院跡)に工を起し、二年三月竣工の式を擧げ、四月米國醫師ツェトルを備聘して、始めて治療を施す様になつた。之今の縣立神戸病院の前身である。

獄舎は新縣廳舎の造營と共に、同一地内に假獄舎を設けたが、囚徒日に増して直ちに狹隘を告げる様になつたので、別に阪本村に一區の民地を購入して假獄舎を移し、更に新たに増築して、元年十二月頃工を終へた。後八年宇治野町に二十四年今の石井村に移して今日に及んだ。

湊川架橋は、當時神戸に出入する人多きに從つて、兵庫も亦出入の人多く、神戸に移住する内外人増すに從つて、神戸の家屋不足を告げ、自然兵庫に宿泊し

て神戸に往來するものも殖々、兩市の間、朝暮諸人の往還益々繁きに拘はらず湊川には一の架橋もなく、暴雨の際には常に、兩市の交通を杜絶さるゝ状態不便此上なかつたから、縣廳で新規架橋の工を起し、元年十月八日落成して、從來の不便を除いた。之實に湊川架橋の創始であつたのである。

更に明治元年に於ける貿易状況に就いて見るに、開港早々外國商人の來港するものが頗る多かつたにも拘はらず、當時外人居留地は、まだ土工に着手しかけたまゝで、居館商舖を建築する事も出來ず、外人は止むを得ず我民家に僑居する状態であつて、外國公使等頻りに當路に、居留地工事未成の迷惑を訴へたから、新政府は餘儀なく、元年三月七日を以て雜居を許可し、其境界を、東は生田川、西は宇治川、北は山邊、南は海岸と劃り、此地内に於て、日本人より地面又は家屋を借り、或は其家屋を買請けた上は、取除、自普請勝手たるべき事を許した。而して、内外商賈の正當なる貿易は、漸く四月から開始せられた。之より先も内外人の賣買は皆無ではなかつたが、外商は多く諸侯を華主として船舶武器類を賣込み、諸侯は之に對して、其領内の産物を以て彼に與へた。例

へば土佐藩が船舶兵器を外商より買つた代償に、土佐名産の樟腦を彼に授けた類であつた、一般内商では、時々大阪、京都等の商家から、手代を派して雜貨の賣込などをしたが、此時手代は、風呂敷に商品を包んで脊負つて来て、之路傍又は海岸の砂地に陳列し、洋語を解しないから、手真似を以て外人の需めに應じた。外商もまだ店舗を得たものは甚だ少なかつたから、多くは商品を積載の儘船中に置き、内商の需めがあると、船中から直ちに取り出して、渡すといふ様な、極幼稚な賣買法であつた。而して始めは取引極めて閑隙で居留の外商は徒然に苦む状態であつたから、彼等は兵庫神戸の市中を漫歩し、骨董若くは翫具などを買つたり、或は敏捷に技藝する小猿を求めて、さては言語の通じないために、小猿が技を演じないのに失望し、此貿易は失敗に終つたなど、戯れる様な状態であつた。併し四月に入つては、漸次貿易の秩序が立つ様になり、八月海岸假波止場を設け、既設の運上所假波止場と二箇所の外、貨物の陸揚船載を禁じて、密貿易を防ぎ、十九日伊藤俊介は、神戸開港地に於ける外國事務一切を處理すべき命を受け、外務局内に、書記訴訟掛、地所借屋掛、運上

所收稅掛、免狀掛、市中取締、盜賊改役等を設け、二十八日よりは六十名の外務掛を東西運上所、米國領事館前、宇治野川尻等に出務させ、閏四月一日には四箇所の波止場を定め、外國人荷物陸揚船積規則を頒ち、かくて、英、米、佛蘭、普、諸國の外商、さてはまた無條約國であるが支那商人等と我内商との間に正式なる貿易が行はれる様になつた、其當時の輸入品は、始め毛織物類、縮緬類などの需用が多かつたが、價格の騰貴するに従つて、漸次需用を減じ、之に代つて、黒さわい、毛織へんしい、土耳其赤木綿、及び木綿絲等が好況を呈した。又輸出品は、生絲及び茶を主とし、之に次いで煙草、生蠟等を外商は望んだ。

居留地地均の土工は、漸く元年五月から盛んに行はれ、月を越えて其一部が成就し、同時に居留地海岸約二百間の二重浪返工事、居留地西境鯉川工事、居留地外圍の溝渠六百間等竣工し、居留地東境生田川堤防の修築にも着手したから七月二十四日東運上所で、居留地三十六區を英、米、佛、蘭、普、五國人二十九人に競賣し終り、之より巍然たる洋館は續々建築せらるゝ事となつた。次で

明治二年四月二十一日居留地第二次の二十五區の競賣を、三年四月十六日第三次六十區の競賣をしたが、五年に入つては、居留地道路、溝渠等全く整頓し、洋式家屋亦軒を竝べ街衢大に成つたから、新たに町名を興へ、東西縦道の五條を海岸通、前町、中町、北町、裏町といひ、南北横道八條を東町、伊藤町、江戸町、京町、浪花町、播磨町、明石町、西町といふ事となつた。次で六年二月七日、居留地第四次五區の競賣をなし、全部百二十六區悉く外商の居館商舖又は領事館等となつて今日に及んだ。

以上略述した如く、開港後の第一年たる明治元年は、實に多忙の中に經過し、庶政漸く整ひ、諸般の施設亦漸次進行し、戸口日を追ふて増し、市況月に般賑に向つたが、次の二年三年は少憩の時代で、重要な施設經營はあまり多くなかつた。即ち明治二年は前年來繼續の工事たる、居留地一部の竣成病院の竣工開業等の外、一月中に運上所借庫掛の設置、運上所波止場、望標燈の落成等を見政治方面に於ては、當局が極力、風俗矯正、情弊豫防等一般警務の刷新を圖つた事等の外、特に記す程の事はない、此間二年七月、開港諸事創草の際、敏俊

で大に秩序的創設の技倆を顯はし、神戸の發達に多大の貢獻をした初代の縣知事伊藤俊介は去つて、陸奥陽之助來任し、間もなく翌八月税所長藏(篤)又之に代る事となつた。

明治三年も、東川崎に於ける金澤藩製鐵場の創設(今の川崎造船所の萌芽)間十月に於ける大阪神戸間電信の開通等の外重要な新施設はなかつた。税所知事は九月堺縣に轉じて、十月中山信彬權知事となつた。今や神戸兵庫の住民は、既に新風俗に馴れ、内外人の來住漸く多きを加へ、さすがに、ビードロの家を見て喫驚する様な事はなくなつたが、市街の形狀に於ては、將に一變の機を開かうとして、まだ開かれなかつた。神戸の東端居留地では、既に幾個の洋館を見たが、海岸の如きは、依然として漠々たる砂濱遠く連り、海波砂を呑んで碎け落ちる状態であつた。稍々光彩を田畝の間に添へて居つたものは、僅かに、突兀たる陵上の病院、白壁輝々たる縣廳、荒涼の一區を劃した楠社々地、不夜城の福原遊廓位であつた。兵庫神戸を連絡する西國街道には、尙並木の松天颯に咽び、今は神戸市の中央第一の熱鬧地なる相生橋附近の如きは、まだ寂寥た

る田圃道で、路傍に稻藁作りの風蔽ひを存して居つた。要するに明治三年の頃は依然として尙神戸村の舊觀を脱する事は出来なかつたのである。

明治四年に至つては、前二年に反し、又神戸發達上重要な多くの工事が起つた。即ち海岸石垣、海岸道路、溝渠開鑿、生田川附替、兵庫仲町部新市街設置、阪神間鐵道敷設、道路開設、和田岬燈臺の建設、布引遊園開設、西運上所新築等の諸工事之である。

雜居地一帯海岸石垣築造の工事は、四年二月に始まり、十二月竣工し、又石垣と同時に、起工した東鯉川口から西辨天濱に至る延長四百五十間の海岸道路も年内に竣成し、溝渠も翌五年二月竣工し、居留地海岸各所の築造工事も亦五年三月落成し、次で起した辨天濱港灣の埋立も、五年五月竣工した。之等の工事が竣成の爲に、港灣の利用大に進み、今の海岸道が始めて開けたのである。

居留地の東界に沿ふて海に入つて居つた生田川は、其暴漲の患を除く爲め、其上流熊内村字馬淵から、今の流路に改修する事となり、四年三月土工に着手して六月工を竣へた。其舊川堤川床は此年十月有本明、加納宗七等に拂下げられ

漸次堤を引き川床を埋め、八年には全く市街地となつた。現今の加納町は即ち之である。

鐵道布設事業の着手は併せて兵庫仲町部即ち今の湊東部新市街の設置となり、多くの道路開設の舉となり、大に神戸の發達に資した。神戸大阪間鐵道布設の議は、已に明治三年に決し、同年七月線路の實測に着手し、已にして停車場の位置は福原遊廓の地邊と決し、東は宇治川、西は湊川、北は相生町南側より南海岸に至る東川崎の地を合せて、鐵道用地と定め、此間にある家屋に移轉を命じた。依て民意を納れ、縣廳では字蓼ヶ原、名座古、古湊、橘等の地に新市街設置に決し、四年四月新たに市街とすべき地所を測定して九萬餘坪を得市街設置の條目を定め、五月より土工を起して、爾後續々家屋の新築移轉を見、翌五年二月には總戸數七五九を數ふるに至つた。かくて六年十一月には、市街稍や整頓したから、町名を選び、東西縱道五條を、上橋通、橘通、多聞通、中町通、古湊通と名づけ、別に横路九條を、門前筋、東門筋、御前筋、西門筋、東中筋、大中筋、中筋、西中筋、大門筋と名づけた。又今の福原遊廓の地へも、四年六月

以後舊福原より續々移轉し、僅かの年月の間に當初荒涼たりし今の湊東部は、一大街衢と化してしまつた。而して鐵道線路工事は四年六月着手され七年の始めに終つたが、此間に多くの道路が開設された。即ち海岸から札場町、西ノ町、八幡町を経て北鐵道線路に達する幅五間乃至五間半の三條の大道路は、四年七月から工を起して、翌五年四月に成り、西宇治川から東舊生田川に至る鐵道線路兩側、幅四間の道路は、五年八月に着手して、同年十一月全く成り、今の神戸停車場四近の道路も相繼いで土工を興し、七年十二月皆成り、相生橋も已に其前七年一月を以て架設し終つた。

和田岬燈臺は、明治三年一月民政部で設置に決し、九月工を起して四年四月竣成し、此月二十七日から點火されて、船員をして迷津の嘆なからしむる様になつた。

布引山は古來より名高く、開港後内外人の來遊するものが、甚だ多いので、有志の間に、同山を開き、其東砂子山の丘上に、神宮及び、神武天皇遙拜所を造營して、遊園とする議が決し、縣の贊助をも得て、四年九月工を起し、五年五

月一切の工事成就して、天然の風光は更に人工の爲に明媚を増す事となつた。西運上所改築は、四年五月着手し、翌五年早々竣工し、更に東運上所に於ても四年九月舊幕府建設の借庫三棟の建換工事を起して、翌五年二月落成し、東運上所の新築も五年一月着手されて、先づ荷物上屋が出来たが、俄かに大藏省の命によつて工事を中止した。而して運上所は、開局以來、明治五年五月迄は、たどひ、外國官、外務省、大藏省等の監督は受けたといへ、縣廳外務掛に屬して居つたのであるが、五年五月大藏省租稅寮の直轄に歸して、全く縣廳より獨立したる一官署となり、十一月更に職制を定め、神戸税關と改稱して今日に及んだ。

明治四年は地方政治の上にも大なる變革があつた。即ち廢藩置縣に先んじ、此年四月、戶籍法改正令が發布されて、兵庫神戸地方の行政区及び行政廳が創定され、六月以後、兵庫神戸の町村は、第一區兵庫岡組、第二區兵庫北組、第三區兵庫南組、第四區神戸上組、第五區神戸中組、第六區福原廓の六區となり、従前の名主は、戸長と改まり、一般區行政の事務を取る事となつた。併し此後

神戸の沿革

行政區劃は屢々變更され、四年八月には、市街及び其接近地、外國人雜居地の村落を、第一區神戸上組、第二區神戸中下組、第三區生田宮外四箇村、第四區阪本村外五箇村、第五區福原町、第六區兵庫上岡組、第七區兵庫中岡組、第八區兵庫下岡組、第九區兵庫北組、第十區兵庫南組の十區に分ち、兵庫神戸の各區には、戸長の外副戸長を置いた。次で五年二月には、第一區神戸西ノ町外六箇町、第二區神戸城ヶ下町外四箇町、第三區八部郡花隈村外四箇村、第四區八部郡阪本村外五箇村、第五區新福原町、第六區兵庫相生町外一箇町、第七區兵庫湊町外十六箇町、第八區兵庫北仲町外十一箇町、第九區兵庫島上町外九箇町第十區兵庫出在家町外九箇町の十區と定め、各區に一人又は二人の戸長を置いたが、更に同年七月には従來の第一、第二、第三區を合して第一區とし、第四區内至第十の六區を合して第二區とし、各區に、従來の資格に據らず人才を擧げる趣旨で、住民の選舉した區長一人を置く事となり、尙第一區を三組に、第二區を四組に分け、八月各組の區劃を次の様に定めた。

第一區 神 戸

一 番 組	三角町	大手町	濱ノ町	札幌町	松屋町
	仲ノ町	西ノ町	城ヶ口町		
二 番 組	城下町	東本町	西本町	八幡町	市場町
三 番 組	生田町	北野町	中宮町	花隈町	宇治野町
	第二區 兵 庫				
一 番 組	古湊通	中町通	多聞通	橘 通	上橘通
	新福原町	相生町	東川崎町		
二 番 組	佐比江町	湊 町	永澤町	江川町	戸場町
	西大路町	木戸町	小物屋町	魚棚町	鹽屋町
	細辻子町	鹿屋町	富屋町	島屋町	西宮内町
	算所町	三川口町	北仲町	南仲町	切戸町
	新 町	磯ノ町	神明町	北逆瀬川町	南逆瀬川町
	小廣町	東柳原町	西柳原町	門口町	
三 番 組	東出町	西出町	川崎町	北宮内町	宮内町

神戸の沿革

宮前町 島上町 匠 町 松屋町 鍛冶屋町
 濱新町 船大工町 關屋町 新在家町 出在家町
 今出在家町 和田崎町 今和田新田

四番組 阪本村 荒田村 奥平野村 石井村 鳥原村
 夢野村 口妙法寺村 奥妙法寺村 車 村 白川村

明治七年四月に至り、神戸兵庫の之等組分を廢し單に第一區、第二區の名の下に總括する事となり、又十年一月から區會を開設する事となつた。次で明治十二年一月、神戸兵庫兩市街及び阪本村を合して神戸區と稱し、區役所を北長狭通四丁目に置き、同時に區長は官選となつた。尙縣權知事中山信彬は四年十一月職を辭し、特命全權公使岩倉具視に隨行して歐米に赴く事となり、同年十二月神田孝平兵庫縣令として就任し、九年九月迄在任した。

更に明治四年頃の貿易狀況を略述せんに、當時の貿易額は詳に知る事は出來ないけれども、一年を隔てた明治六年の貿易額は已に八百四拾萬圓餘に達して居るのを見ると、此頃の貿易も決して少額ではなかつた様である、而して當時の

貿易は無論輸入が多くて、重なる輸入品は、毛織物、金巾類、綿絲、砂糖、飲食物、鐵鋼諸器械、藥種、染料、石油等であつた様であるが、輸出も漸次品種と數量を増し、製茶、木蠟、煙草、生銅、乾物、屏風、竹材竹器、陶器等を多く輸出した。特に清國との貿易は大に進歩し、我より雲州のお種人參、大和の芍藥の根等の天産物、煎海鼠、鮑、鰯、等の海産物を最も多く輸出し、彼よりは、朱、藥種、吳呂、更紗等を多く上海から輸入して來た。貿易の發達に連れて、交通機關も此年頃から漸く整ふ様になつた。即ち内地海岸諸港、又は清國上海等との間の海運は、此頃から盛となり、郵便も東京、長崎間の線路が先づ開かれる事となり、明治四年十二月には、神戸郵便役所を市場町（今の元町六丁目）に置いて、郵便事務を扱ふ様になり、後七年三月今の神戸郵便局の地に移つた。又人力車も明治三年六月始めて當市で一輛を挽き初めて以來四年に至つては益々増し年末には約八十輛を數へる様になつた。

以上述べた如く明治四年には、神戸兵庫の地は、續々各種の土木が起り經營があつて、村里は漸次に市形に變じ、自然の儘であつた海灣は、施工の港津たら

んとする状態となつたが、五年、六年、七年、の頃も依然此情勢を繼續して、神戸は外形に於て少なからざる進歩發達を見た。即ち山手の縦横街路は五年十二月より開設に着手せられて、翌六年十一月名稱が定まり、山麓第一の縦道を山本通、其第二を上山手通、其第三を中山手通、其第四を下山手通、宇治野表通、同裏通と命じ、南北横道を、有本町、生田宮筋、三ノ宮筋、城ヶ口筋、前山筋、諏訪山筋、再度筋、宇治野筋と命じ、尙諏訪山温泉も此頃開かれた。又榮町の大街路も、五年より開鑿の準備に掛り、翌六年中に道路溝渠等悉く落成して七年一月榮町と名づけた。此外六年中には、宇治川兩岸の沿道、石垣、及び宇治川の三石橋、生田川以東の新開國道、加納宗七の小野濱船溜等皆成り、縣廳舎移轉建築の工事も亦落成した。縣廳舎は曩に元年九月、阪本村に新築されたが、幾年を出でずして狹隘を感じ且腐朽し、加之居留地とあまり隔絶して居るので、不便と浪費に堪へず、終に和蘭領事コルトハルスの家屋を買ふて尙此に増築し、六年一月工を起して、五月竣成し、同月二十五日舊廳舎から移轉した、即ち今の縣廳の地である。而して今の縣廳舎は其後三十二年一月から改

築に着手して三十五年五月に落成したものである。又明治七年には、阪本、奥平野、兩村に跨れる地に、大阪鎮臺分營建設工事が起り、此年八月工を終つて砲兵一小隊が入營し、同年四月鐵道局設置の神戸停車場内蟹川船渠成り、後九年七月更に鐵道棧橋も出來た。尙湊川堤塘工事も七年中に出來て、自然公園たる状態となつた。

明治六、七年の頃は、更に舊兵庫方面に於ても各種の大工事が起つた。即ちまづ楠社門前通から兵庫市街の背後を通つて、柳原町に達する大道路は、六年二月工を起して間もなく成り、湊川に一橋を架設して今の多聞通に聯ね、之を新町橋と名づけた。已にして六年五月此新道以南の地を新市街地とする議が起り七年六月、道路溝渠等の土工に着手して、同年十一月修築を終へたが、此際別に町名を選ばないで、仍湊町、永澤町、三川口町、柳原町の地に屬せしめ、昔湊川漲溢防禦の目的で築成した兵庫外廓堤の地も全く新市街地と化してしまつた。次に兵庫新川の開鑿も七年七月工を起して八年五月竣工した。

以上各種土木工事の外、明治五年九月には兵庫裁判所設置の達があつて、十一

月から聽訟斷獄は裁判所に引繼がれ、六年五月以後阪本村の舊縣廳舎は兵庫裁判所と變じ、司法事務は全く縣廳の手を離れて獨立する事となつた。又五年には學制頒布の爲め此年より翌六年にかけて今の市の區域内に俄かに二十四の小學の設立を見る様になり、基督教も明治三年輸入以來、六七年度の頃は數多の宣教師も來て、布教の傍ら語學等の教育に従事し、七年には北長狹通六丁目に組合教會の會堂が設けられ、次で八年には英和女學校(今の神戸女學院)九年には兵庫教會、十年には多聞教會等が起る様になつた。

尙明治五、六、七年の頃は、内外人の來集益々多く、貿易も大に振興し、商社銀行等の設立相繼ぎ、交通上も一發展を見、五年八月驛駕傳馬の舊式運搬は廢せられ、兵庫陸運會社が起つて公私の荷物運搬に當る事となり、翌六年三月大阪陸運元會社と連絡を通じ、八年に至つて、内國通運會社に統一せられる様になつた。又七年三月二十一日には阪神間汽車試運轉が行はれ、同年五月十一日から一般の運輸が開かれる様になつた。之實に明治五年二月開通の東京、横濱間の鐵道に次げる我邦最古の鐵道である。

以上説いた様に明治四年以來は、續々各種の土工が起り、村間の形は漸次變化して、都市の形骸が出来たので、七年六月二十日を以て、雜居地内市街の名稱を改稱し、第一區八部郡神戸町の大手、濱、札幌、松屋、中、西、城下、東本西本、八幡、市場、諸町を廢して、新たに元町通(一丁目より六丁目迄)榮町通(二丁目より六丁目迄)海岸通(一丁目より六丁目迄)北長狹通(二丁目より七丁目迄)を置き、又北野、生田宮、神戸上組、中宮、花隈、宇治野、神戸下組、を廢して、北長狹通一丁目及び前年新置の山本通(一丁目より六丁目迄)上山手通(二丁目より六丁目迄)中山手通(一丁目より六丁目迄)下山手通(一丁目より六丁目迄)宇治野表通、同裏通に合せた。以上は東西の市形で、南北なる有本町以下宇治野筋に至る八道の名は、六年十一月に定めた通りである。併し當時は、まだ各町人家連齋の様ではなく、新築家屋は彼處此處に參差として起り、廢家茅屋と交互して、爾後暫く尙市街の體裁は整はなかつたが、隆々たる新興の勢は、却つて其間に大に見る事が出来たのである。

明治八年に及んでは、已に瓦斯燈の點火を見、又生田川の舊堤に沿ひ、約一萬

神戸の沿革
 坪の地面を割して、内外人遊園が設置された。之即ち今の加納町遊園地である。

斯の如くにして新開の神戸は、凡そ明治八、九年の頃を以て、創業の施設が一段落を告げた。之より以後は、已に築かれたる基礎の上に、將に着實なる秩序的發達を見んとするのである。

三、明治十年以後の發達

明治十年以後に於て、神戸は、其外形内容共に大に發達したが、貿易、商工業、交通、教育、市政等の發達沿革は、之等各條下に於て已に、概略附説したから、今再び述べない。茲には今迄記述しなかつた事の内、明治十年以後に於ける神戸の發達、將た歴史上重要な現象を略述しよう。

明治十年西南の役は、當時の神戸市況の上に少なからざる影響を及ぼした。戰爭前二三年は神戸港の創業的各種土木工事漸く終を告げ、一時何となく淋しさを感ぜ、確實なる商業の不振であつた爲め、各種商品に就いて相場取引盛んに行はれ、賭博と商業とを同視する氣風生じ、其他忌まはしい現象が少くなかつ

たが、亂起るに及んで、此地は、征討出師の根據地となり海陸運輸の要地となつたから、市況頓に生氣を加へ、一時甚だ殷賑となつた。

明治十一年以後は不換紙幣増發の結果、物貨益々騰貴して、人々生活の安心を得なかつた爲め、始めは一時商工業の勃興を來したにも拘はらず、概して商勢不振となり、十四五年に至つては、殆んど其慘狀の極に達した。此間明治十一年五月から十二年二月にかけて辨天町築成の工事があり、又明治十三年七月には、今の下山手通四丁目なる縣廳山手の地區へ、十年三月以來設置されて居る植物試験場(十六年概統農場と改稱し、更に十八年試験農場と改稱した。二十五年至つて全く廢した。)内に、縣下の諸物産を陳列せる物産展覽會を設けたが、會々聖上御巡幸の事があつて、之等物産を天覽に供する事を得、爾後引續き明治十六年六月迄存置してあつた。尙十四年には植物試験場の一部を割いて縣會議事堂を建築した。明治十五年に至り、政府は紙幣の價格回復の策として、兌換の政策を實行したので。翌十六年頃からは、紙幣の價格は漸く回復の方向に進んだが、今度は物價は日々に低落を告げ、商況却つて振はず、事業亦殆んど興らず、明治二十年頃迄は連年不景氣の嘆聲が絶えな

神戸の沿革

かつた。明治二十年、二十一年頃は、不換紙幣償却の結果、低價全く回復して
 經濟界は健康體に復し、輸出人も漸く盛となり、企業心動いて會社、工場の設
 立漸く多きを加へ、家屋建設等の土木の爲に、勞力の需用も亦大に起り、久し
 振りに市況活氣を呈する様になつた。即ち一二の例を示せば、神戸電燈會社は
 二十年十一月を以て起り、翌二十一年九月十日の夜始めて發電を開業して、夜
 猶晝の如き晃々たる明光を市中に放つに至り、山陽鐵道會社も二十一年一月成
 立し、此年十二月已に汽車は姫路迄開通して、大に交通の便を増す事となつ
 た。

明治二十二年は神戸の發達史上最も注意すべき年で、已に述べた通り、此年四
 月から、今の葺合、神戸、湊東、湊西の四部を合して神戸市と稱し、市制を實
 施し、之より市は更に大なる發達を爲して、近時に及んだのである、二十二年
 後半から翌二十三年にかけ、農作不良の結果、米價暴騰し、貧民増加し、一時
 又不景氣になつたが、此間とても二十三年四月十八日には、神戸灣内で觀艦式
 が行はれ、聖上陛下の御臨幸があつたので、此盛典を拜觀する爲に、當日前後

は遠近の人民が雲集して來て、市中は非常の雜鬧であつた。ついで翌二十四年
 一月六日には、來遊の國賓たる現露國皇帝、當時の皇太子ニコラス殿下と共に
 八隻の露國艦隊入港し、殿下は直ちに上陸せられて市中を巡覽し、後京都に赴
 かれたが、十一日大津で兇漢津田三藏の爲め不慮の負傷があつたので、同日京
 都旅館から歸神の上直ちに軍艦に移乗せられ、上陸中の八百餘の露國水兵も萬
 一の變を慮つて、直ちに上陸を禁せられた。此時我 天皇陛下には、變報を聞し
 召さるゝや否や、十二日東京御發策、京都着御の後、直ちに一旦御來神あらせ
 られ、更に二十日再び御下神の上、親しく露太子の御乗艦マゾフ號に臨ませら
 れて、露太子に御對顔御慰問遊ばされ、互に萬歳を三呼して交情他なきを誓は
 せ給ふた。此に於て久しく愛心忉々たりし市民も漸く愁眉を開く事が出來た。
 此際神戸には、聖上陛下兩度の行幸を見る外、公私の用務を帯びて來神する人
 極めて多く、一時非常の混雜を來たしたのであつた。尙此年六月三十日には、
 清國北洋艦隊旗艦定遠以下六隻水師軍門丁汝昌に率ゐられて來港し、七月四日
 一旦横濱に向つて去つたが、同月十九日再び入港して二十四日拔錨した。此威

神 戸 の 沿 革

風堂々たる艦隊は、四年の後には戦勝の結果實に全部我邦の有に歸したのであつた。

明治二十五年には市内電話の交換も始まり、此年以後も會社工場續々起り、市況日に進んだが、二十七八年戦役の當時は軍隊通過の爲め市中は、更に一種の活氣を添へた。戦後に至つては、新事業の勃興殊に目ざましく、戸口も日に増し、商工業交通等各般の上に更に一層の發展を來した。例示せば、已に述べた如く、市政に於ては、明治二十九年四月、從來の市の區域に、新たに今の湊、林田の二部を加へて大に面積戸口を増し、交通方面に於ては郵船會社は二十九年中に歐洲、米國、濠洲等の長航路を加へて、神戸より、直ちに我汽船によつて、之等の諸外國に航する便を得るに至り、新事業の一、二を挙げば、兵庫運河株式會社は二十八年十一月設立を全ふして、翌二十九年より三十一年にかけて、運河開鑿の大業を竣成し、湊川改修會社も亦終に三十年成立を全ふして、直ちに、湊川附替の工を起し三十五年に至つて略土工を終り、鐘ヶ淵紡績會社兵庫工場も二十九年に建設されて、爲に大に尻池方面の繁榮を増す事となつた

かくて明治三十年以後も、注意すべき大會社大工場等の設立頻々相繼ぎ到底記載する事は出来ない。又教育等の精神的事業も、最近十年許の間に大に發達した事は、已に述べた通りである。

特に明治三十年以後は、市の發達に伴ふて、市の直營にかゝる幾多の大事業が相續いて起り、今日尙着手中のものも少くない。今茲に其著大なるものを概括するに、水道工事は三十年から起り三十三年以後通水して居るが、近時更に擴張の設計が決められた事は已に記した通りであり、築港の大業も已に四十年から着手せられて、今や工事着々進捗して居る事は誰も見て知つて居る通りである。此外市の北部山地に於ける造林砂防の事業も、三十五年以來盛んに施行せられて、今や水源涵養、風致、氣象等の上に漸次好結果を及ぼす様になり、宏壯なる市廳舎の建築も四十年十一月から工を起して四十二年十二月全く成り、今や市政一切の事務は清新なる新廳舎で行はれて居る。又頗る大規模なる東山避病院の新築も今將に成らうとして居るし、下水幹線の開鑿大土工も亦終を告げようとして居る。

尙明治三十年以後の最近十年許の間に、神戸港外に於て實に三回の盛大なる觀艦式(明治三十三年十一月、同三十三年四月、同四十一年十一月)が行はれ、其都度全帝國の艦艇と數十萬の人が來集して、非常の繁鬧を極めた事も注意すべき史實といはねばならん。

又市政の最上要位にある神戸市長は、明治二十二年市制實施の際鳴瀧幸恭氏任に就き、爾後三十四年迄二期十二年の間其職にあつたが、此年坪野平太郎氏第二代の市長となり、三十八年に至つて其職を辭したので、同年十月第三代の市長として前任水上浩躬氏を迎へ、四十二年六月迄在任、四十三年三月現任鹿島房次郎氏が就職した。尙縣知事は、神田孝平の後、明治九年九月森岡昌純、十八年四月内海忠勝、二十二年十二月林薫、二十四年六月周布公平、三十年四月大森鍾一、五氏の更任を経て三十三年十月現任服部一三氏を迎へたのである。市制實施後神戸市は、殊に新開の市街地が多く、街衢名稱の新設變更が多かつた。今次に之を一括して記さう。

まづ明治二十四年六月には、兵庫部國道以北の新開市街地に、南より北に數へて順次に羽坂通(自一丁目至四丁目)塚本通(自一丁目至八丁目)大開通(自一丁

目至十丁目)水木通(自一丁目至十丁目)中道通(自一丁目至九丁目)の命名があつた。後二十七年九月には、大に市街名稱及び區域の變更があつた。即ち此時兵庫部に於ては、西方の土地字本能寺の内を割いて、南逆瀬川町に編入し、又東西柳原町及び南逆瀬川町の内を割き、竝に舊來の字たる濱ヶ崎、針ヶ崎、杉原口、能添、渡瀬、本能福寺、川田、玉ノ町、九十歩、蘆原、町田、土取、和田野、豌豆、道場跡等の名稱を廢して、新たに濱崎通(自一丁目至四丁目)入江通(自一丁目至八丁目)小川通(自一丁目至九丁目)須佐ノ通(自一丁目至八丁目)松原通(自一丁目至七丁目)蘆原通(自一丁目至六丁目)住吉通(自一丁目至四丁目)今出通(自一丁目至三丁目)の町名を設け、尙今出在家町を分割して一丁目より三丁目迄を置き、東出町東組を改めて、東出町一丁目とし、同中組を東出町二丁目、同西組を東出町三丁目と改稱した。又湊東部では、上橋通四、五、六七丁目を廢して夫々上橋通一、二、三、四丁目とし、橋通二丁目を分割して、橋通一丁目、二丁目とした。更に神戸部では、三宮町イ號、ロ號、ハ號を三宮町一丁目、二丁目、三丁目と改め、加納町を分割して、一丁目より六丁目迄とし、

下山手通六丁目を割いて花隈町を置き、下山手通七丁目を割いて同八丁目を新設し、濱宇治野町を廢して、元町通六丁目及び北長狭通八丁目とし、再び北野町(自一丁目至四丁目)を置き、山本通を一丁目より五丁目迄とし、同時に山本通、中山手通、下山手通等に於て多少區域の變更があつた。次いで翌二十八年一月には、湊東部に於て、東川崎町を分割して一丁目より七丁目迄とし、尙東川崎町の内を割き、相生町へ併せ、同町を分割して相生町一丁目より五丁目迄を置き、湊西部に於て、湊町を分割して一丁目より五丁目迄、永澤町を分割して一丁目より四丁目迄、三川口町を分割して一丁目より三丁目迄、南逆瀬川町を分割して一丁目二丁目を置いた。尙同年三月には、湊東部に於て、阪本村の内を割いて荒田村に併せ、荒田村を荒田町と改稱して一丁目より四丁目迄を置き、元荒田村の内を割き阪本村へ合し、阪本村を楠町と改稱して、一丁目より七丁目迄を置き、又宇久保、風呂ノ谷等の名稱を廢し、之に阪本村の一部を割き加へて宇治川町と稱した。已にして明治三十年五月には、兵庫の中道通以北新開の市街地に南より北に數へて、下澤通(自一丁目至七丁目)上澤通(自一丁

目至八丁目)松本通(自一丁目至八丁目)大井通(自一丁目至三丁目)と命名し、三十二年四月には、生田川以西の葎合部に北より南に數へて布引町(自一丁目至四丁目)生田町(自一丁目至四丁目)二宮町(自一丁目至四丁目)琴緒町(自一丁目至五丁目)旭通(自一丁目至五丁目)雲井通(自一丁目至八丁目)小野柄通(自一丁目至八丁目)御幸通(自一丁目至八丁目)磯上通(自一丁目至八丁目)八幡通(自一丁目至五丁目)磯邊通(自一丁目至四丁目)濱邊通(自一丁目至八丁目)を新設し、三十三年十月には、林田部に、正慶町、明治通(自一丁目至三丁目)明和通(自一丁目至四丁目)御所通(自一丁目至四丁目)和田山通(一、二丁目)を新置し、三十四年十二月には生田川以東鐵道以南の葎合部に北より南に數へて順次に東雲通(自一丁目至六丁目)八雲通(自一丁目至六丁目)日暮通(自一丁目至六丁目)吾妻通(自一丁目至六丁目)北本町(自一丁目至六丁目)南本町(自一丁目至六丁目)眞砂通(一、二丁目)を新設し、三十六年一月には、生田川以東鐵道以北の葎合部に鐵道より北に數へて順次に、若菜通(自二丁目至七丁目)國香通(自二丁目至七丁目)神若通(自二丁目至七丁目)旗塚通(自二丁目至七丁目)熊

神 戸 大 観

神戸の沿革

内橋(通自二丁目至七丁目)を置き、又林田部に東尻池町(自一丁目至九丁目)眞野町、梅ヶ香町(一、二丁目)を新設し、三十八年十二月には、葺合部に更に熊内町を置き、三十九年四月には、林田部に三石通(自一丁目至四丁目)上庄通(自一丁目至五丁目)中庄通(自一丁目至三丁目)和田宮通(自一丁目至八丁目)笠松通(自一丁目至十丁目)小松通(自一丁目至六丁目)濱山通(自一丁目至六丁目)を新設し、翌五月更に林田部に於て舊字名を變更して、濱添通(自一丁目至五丁目)荻藻通(自一丁目至六丁目)を設け、同年十二月葺合部に脇濱町(自一丁目至三丁目)を置き四十年十月には、東池尻の舊字名を改めて、尻池北町(自一丁目至三丁目)同御藏通(自一丁目至七丁目)同菅原通(自一丁目至七丁目)の新町名を興へ、次いで同年十二月には、林田部西野及び其四近の地に、一番町(自一丁目至五丁目)二番町(自一丁目至四丁目)三番町(自一丁目至六丁目)四番町(自一丁目至八丁目)五番町(自一丁目至八丁目)六番町(自一丁目至八丁目)の新町名を命じた。

以上略述した如く、神戸は開港以後僅々四十年許の間に、外形内容共に大に發

神 戸 大 観

展し現今では、常に日本のみならず、實に全世界に於ける、貿易、商工業、交通等の一大中心都會となつた。其發達の速かなる、誰か驚かないものがあらう。(完)

神戸の沿革

明治四十三年七月十五日印刷

明治四十三年七月二十日發行

定價金六拾五錢

著作者 船井信一

神戶市元町五丁目二十三番地

發行者 柏佐一郎

神戶市再度筋三十四番屋敷

印刷者 益田勝利

神戶市再度筋三十四番屋敷

印刷所 光村印刷株式會社

發行所

神戶市元町五丁目
電話長五四六番

寶文館

衛生的的高等飲料

天然鑛泉



シヤンペンサイダー

神戸市元居留地百七番館

發賣元
リネル商會

▲商 業 家

▲工 業 家

▲輸出入業家は

大に弊社を利用せよ

世界到る處の新聞雜誌に掲載する廣告を、
現實に、取扱ひ得べき者は、日本廣しと雖
も、唯だ、弊社ある而已、されば、歐米は
勿論、南米、南洋、印度、暹羅、世界到る
處、苟も新聞雜誌の發行せらるゝ處と、

- 商取引を開始せんとするとき
- 嶄新なる見本品を獲んとするとき
- 商品の販路を擴張せんとするとき
- 賣捌代理店を選定せんとするとき
- 買入代理店の選定せんとするとき
- メールオーダー業を營まんとするとき
- 輸入品の一手販賣權を得んとするとき
- 英、和翻譯圖書及商品目錄を發行せんとするとき

弊社を利用するが迅速にして且つ經濟なり

神戸居留地三十八番館

東洋廣告取次會社

業務擔當社員 トーグラス、エム、ヤング

支 店

東京 麹町區八重洲町一丁目
 横濱 濱萬國建築館内
 英 國 倫 敦
 米 國 紐 育

96
505

メリヤス肌衣
内外雜貨

神戸市元町通五丁目
山本甚吉商店

長電話 壹六九六番
振替口座大阪六六四〇番

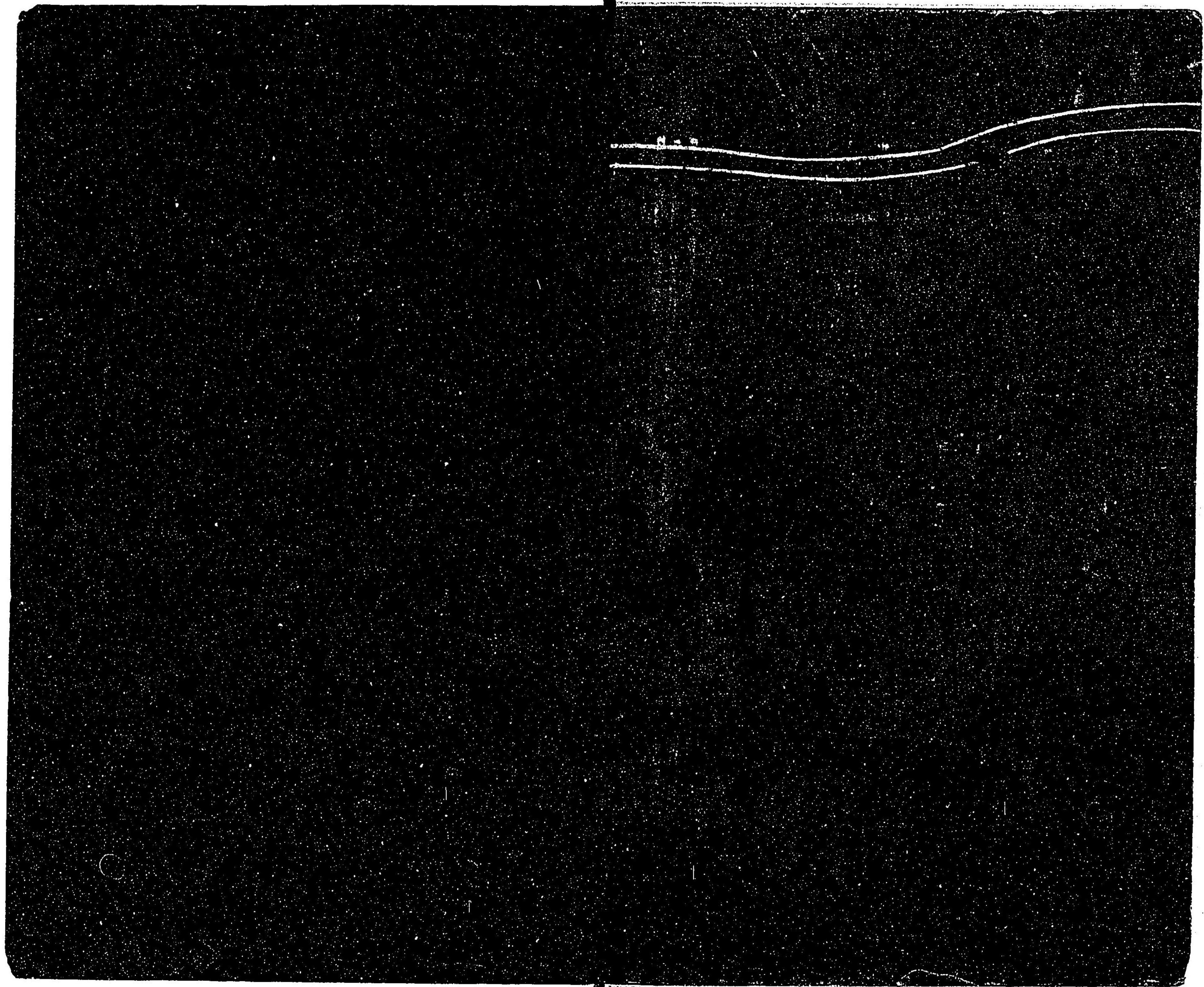
神戸市再度筋

光村印刷株式會社

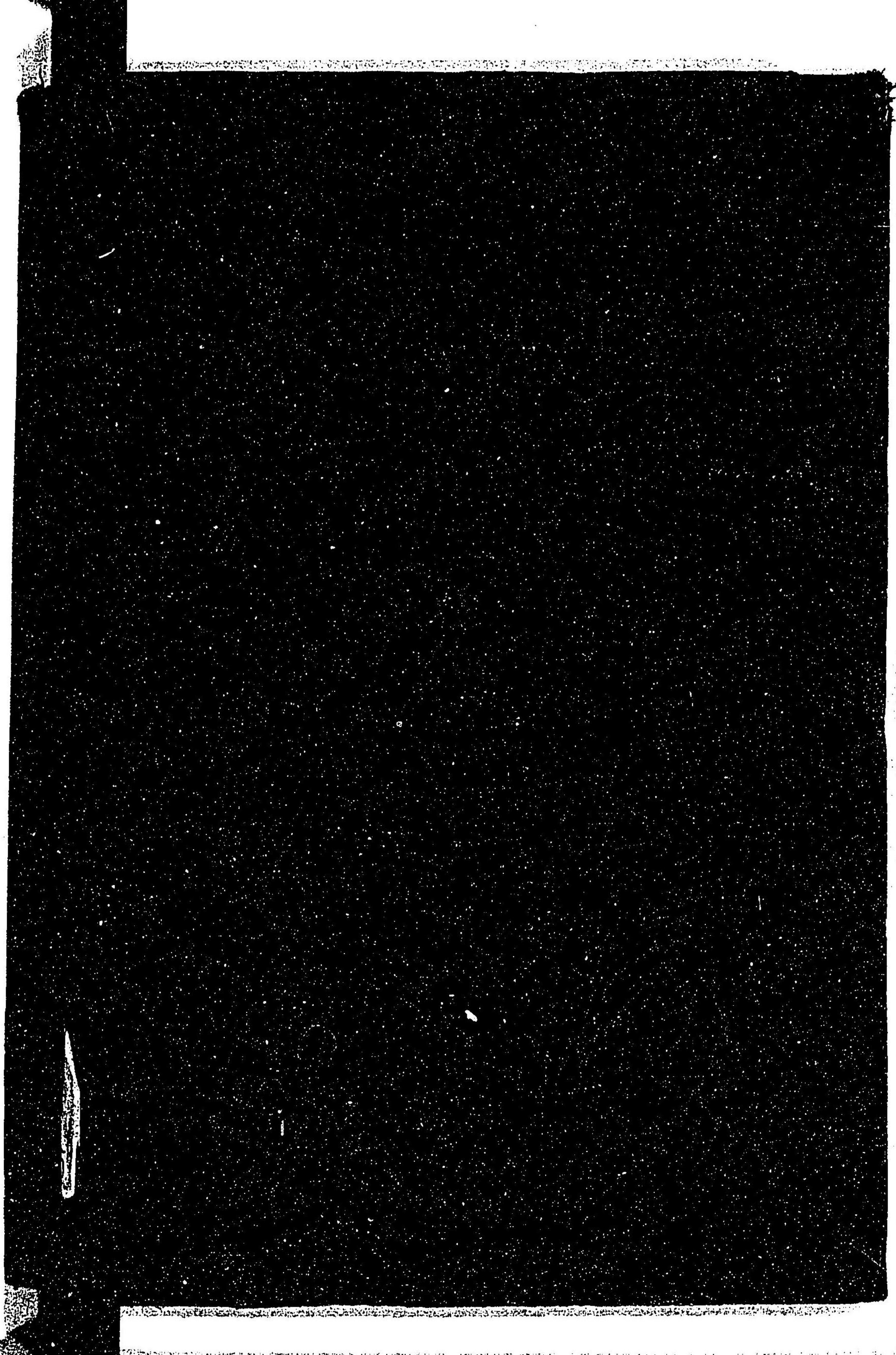
電話 三二二六番

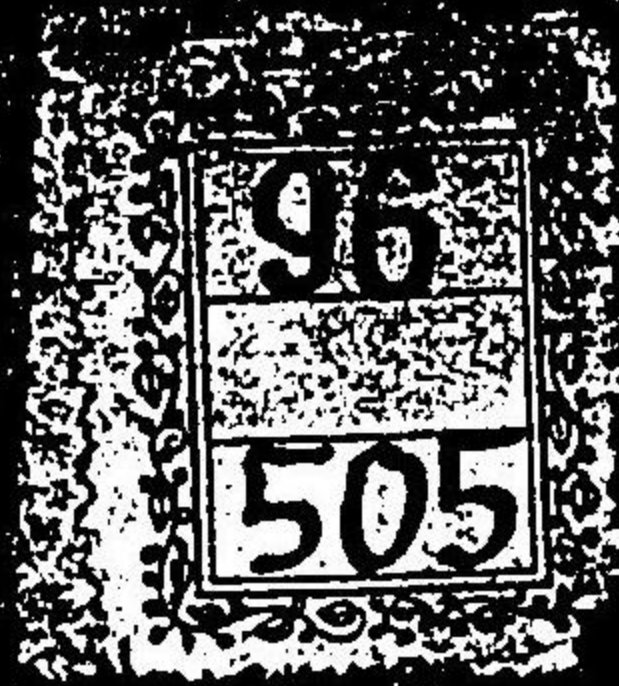
電話 一〇四六番

振替口座 東京 八四五番



96
505





025422-000-7

96-505

神戸大観

船井 信一/著

M43

ADC-2872



